

女鑑

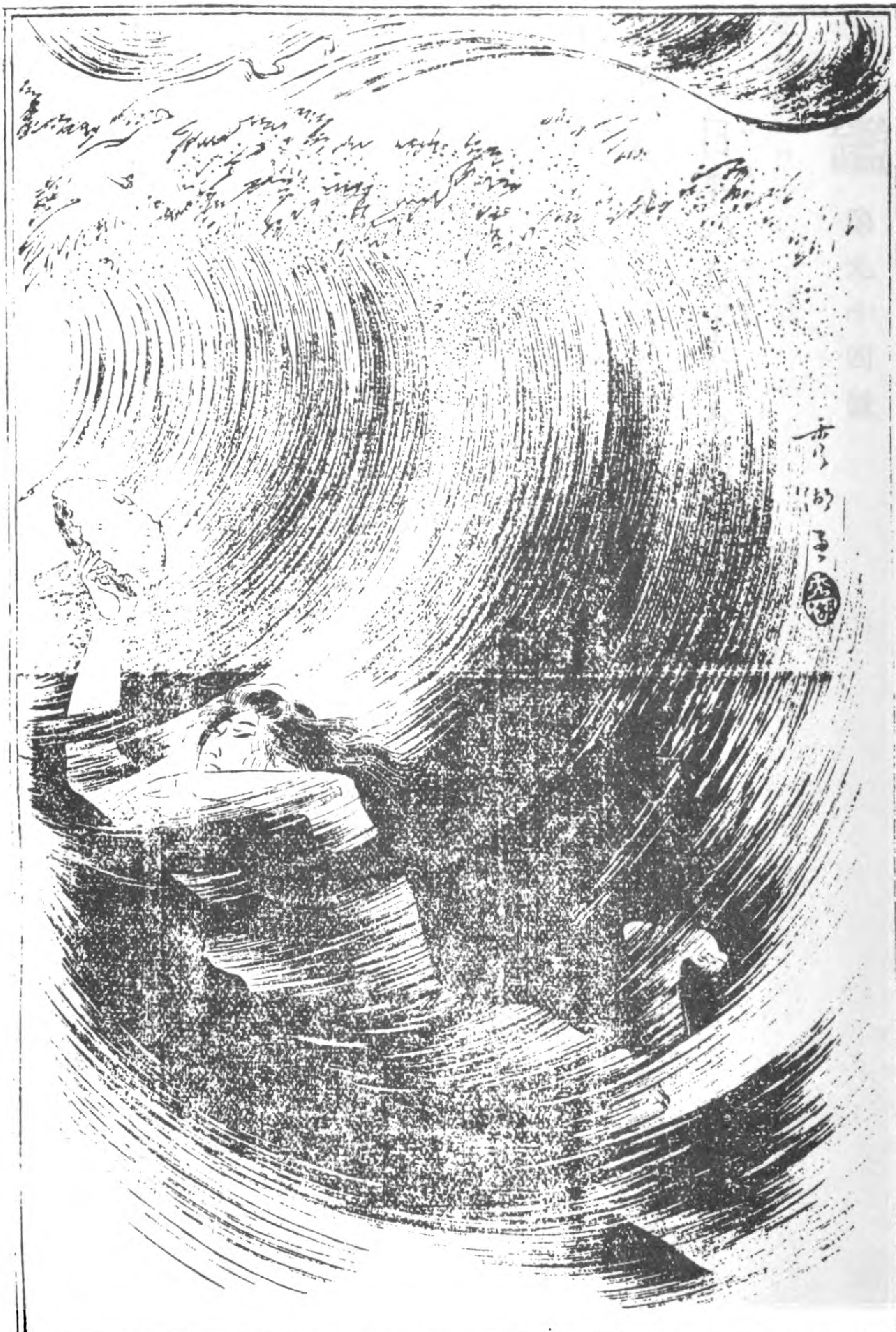
明治二十八年九月二十四發兌

第九十四號

東京國光社

女鑑第九拾四號目録

小々箒少女



日本の女子たる最要素

眞に日本の女子たるに、最必要なる事といふは、おのれは元來如何なる者ぞといふ事を知るにあり。女子のみにあらず、總じて人は、おのれの何者なるかを知るといふ事、是非にありたき事なり。それも、哲學者とやらむむつかしげなる人の論ずる如き、人といふ者元來何者なるか。何が故に、此の世に生れたる。如何なる處を去りて、此の世には來りたる。何を望みてか、此の世路をたどる。何がゆゑに、此の世を去る。此の世を去りて、何處へか行くなどいふごとき、むづかしき人といふ者の理屈を知れといふにはあらず。吾人が此處に知るを必要とせるは、さる理論の上のものにあらず、むしろ實際の上に傾きたるものなり。「吾人が此處に必要とするものは、數千年の久しき、動かず變らず、立派なる一

廉の人間の歴史をもちたる日本國の人と生れ來て、現在日本國の土地に住み。日本の國の日月を數へ、現在日本國の人といひ人といはれ人たるべきには、是非しかと覺悟してあらでは、叶はぬ所の、「人は如何なる者なるか」といふ考へをいふなり。聽て、これを頭に胸に腹に、精神に血液に、身體髮膚の細胞纖維に、しかと納むるにあらずば、此の日本國の人たる者に成り能はざる所の人たるの考へをいふなり。これを覺悟せずば、此の日本國の人たる資格を作る能はず。これを覺悟するからに、能く此の日本國土に住むの目的、此の國土に立つの方針を得、亦日本の國人たるの活動を得、而して、誠に日本の國人たるの資格を得るなれば、日本の國の人たるに、最大最重最切なる考へなり。一日も、われ〱同胞の、共に忘るべからざるものなり。最大に最重く最切なりと雖、別にむづかしきものに非ず。殆んど、われ〱同胞が天性に固有なるべき所なり。固有せざるは、既に天性に背きたるなり。

れのれは何者なるかといふに、日本の國人は、則ち伊邪那岐伊邪那美の二神が作らせ給へりといふ此のめでたくも豐かなる神州の土に生れ、ちはやぶる神ながらに居ます天皇の有り難き御光り、溫かなる露の御惠みに生ひ立ち、國の爲め君の爲め、赤き心の花とにほひ、花と散るべき民草にこそあるなれ。去る二十三年十月三十日、下したまへる敕語にも、教へたまへる如く、

爾臣民父母ニ孝ニ兄弟ニ友ニ夫婦相和シ朋友相信ジ恭儉己レヲ持シ博愛衆ニ及ボシ學ヲ修メ業ヲ習ヒ以テ智能ヲ啓發シ德器ヲ成就シ進ンデ公益ヲ廣メ世務ヲ開キ常ニ國憲ヲ重ジ國法ニ遵ヒ一旦緩急アレバ義勇公ニ奉ジ以テ天壤無窮ノ皇運ヲ扶翼スベシ

斯くあるが、即ち日本の國民たる身分なり。眞に忠良なる日本の人民といふ者の本性なり。

われ〳〵は、やがてかゝる本分の者なる事を覺悟し、さて、此の本分を以て立

ち、これを以て行き、これを以て進み、これを以て考へ、これを以て學び、これを以て勵み、これを以て行ひ、これを以て勉め、これを以て生き、これを以て盡くし、この本分を、いよ〳〵磨き、いよ〳〵高うし、遂にこれを全うして終りてこそ、初めて完全なる日本國人となるなれ。此の本分を知らずしては、起つも、行くも、進むも、學ぶも、勵むも、確固たる基礎なく、方針なく、遂に完全なる結果は得がたし。必竟無益の勞働を爲して、あはれむべき不完全なる人と成り終らむのみ。されば、この日本人として、おのれ人間は如何なるものなるか、如何なる本分の者なるかを知る事は、最大最重最切の事なりといふなり。

日本の女子は、やがて、前にのべたるごとき本分のものなり。しかも、かゝる本分の家族の母となり、またかゝる國民の母となるべきものなり。此の本分を知りて、これを常に忘れずして、朝夕起居し、衣食し、心を錬り、行を磨き、學

問を脩め、技藝を習ひ、親に仕へ、夫にかしづき、子を教へ、家を脩めなば、自ら世に立つの基礎もたしかに、方針も正しく、百事効あり、百行道あるを得て、遂によく、眞に日本女子にして、良妻といはれ、賢女といはれ、忠良なる臣民といはるべき境に達するなり。この本分を知らずしては、學問も、技藝も、勤勉も、勵行も、撫育も、治家も、何の爲め誰が爲めに爲すか、目的も方針もたしかならず、正しからず。從て、完全なるを得ず。否無益をまぬかるを得ざるなり。大方の嬢たち、嬢たちは必竟如何なる者なるか、日本の女子たる本分を忘れ玉ふ勿れ。やがて、又嬢たちは、此の日本の美しき山河、めでたき國家、かしこき天皇の幸福なる生民なり、忠良なる臣民なりといふ一念を忘れ玉ふなかれ。此の一念が本なり。百事百物 末なり。此の一念なき女子は、よしや學詳しきも、藝多なるも、顔うつくしきも、姿はてやかなるも、言巧みなるも、遂に日本の女子としては、不完全なる者不具者たるを免るゝ能はず。不具者は元

來憐れむべき者なりと雖、かゝる不具者は憎まざるを得ず。而して、彼の釋迦といふ者の奴隷なり、耶蘇なる者の奴隷なりといふを、本分とせる不具者に至りては、日本の女子として、不忠なり、不良なり、不義なり、不德なり、決して許るすべからざる罪人なり。

論說

女子のたしなみ

二十二木生

女子はなみだもろきものなり、されど、武士の妻は夫が軍の門出に臨みては、妄りに不吉の涙は灑がざるべし。その泣きたさ、胸の思を言ひたさは山々なれど、國の爲め、君の爲め、夫の爲めを思ひて、泣かず、語らず、嬌艶露を含みて、朝顏の露を帶ぶるが如く、馬に上る夫をじッと見て、冷やかなる笑靨を溢すが如きは、何ぞ其れ可憐なるや。此れ實に女子のたしなみ也、かゝるたしなみは、敎育あり、分別ある女子にして始めて之を能くす。下等の婦女子に至ては、嬉しき事あれど、げた〳〵と笑ひ、悲しき事あれど、わい〳〵と泣き、腹立つことあれど、ぷん〳〵と怒る、かくて

ば腹の中が見え透きて、賤しくも、きたなくも、一見人をして愛相をつかさしめむとす。たしなみ無きも亦甚しといふべし。

おのれ、今茲の夏、日光に遊びぬ。日光を見ずんば結構を語る勿れとの諺ある程にて東照宮の美なることは言ふまでもなけれど、山高く水清くして氣候いと冷しければ、東照宮見物よりは避暑の爲に年々此地にゆく西洋人いと多し。さる西洋婦人輪王寺の前なる一の家を借りて住ひけるが、その子あやまりて二階の梯子段より落ちて、手の骨を折りてけり。暑を避けたまへる貴き女性の御方。此事聞かして、侍醫に命じて手術を施さしめたまふ。この御惠によりて、彼の西洋婦人は子をつれて、侍醫の局に來りぬ。さるに始終大聲あげて、わい〳〵と泣くのみにて、女子のたしなみ絶えてなし。この婦人或は彼國の貴婦人にはあらざるべし。されど、裏店の山の神とも見えず、まづ中等社會の婦人なるべし。その中等社會の婦人が、難有き御惠を被りて、日光には有る筈もなき名醫の療治を受け、而かも多くの人の前に臨めるに、わい〳〵泣くが如きは、何等の醜態ぞや。愛兒が手を折りたるは、誰れとも悲しきには相違なけれども、そこが教育ある女子のたしなみにて、妄りにわい〳〵泣かず、たとひ涙を落すも、人に背きて紅袖もて之を拭ふ位ならむ、猶可憐の趣あり、大聲あげてわい〳〵泣くに至ては、反て憎らしくて、さッぱり可愛想に思はれず。元來、たしなみ深くして、能く感情を抑ふることは、日本人の最も長

ずる所、西洋人は男女共にたしなみ淺く、感情を抑へ切れぬが常なり。何をか感情を抑へ切れぬといふ。曰く嬉しき事あれど、げた〳〵と笑ひ、悲しきことあれど、わい〳〵と泣きて腹の中が見ゑ透く事是也。されど、西洋人は、白日街道、衆人の見る前にても遠慮なく接吻して顧みず、子供が手を折りたるを見て醫師の前にわい〳〵泣く位の事は、彼に在ては當り前なるべし。彼は渾べて動物的也。神州の人に在ては則ち然らず、直に感情を洩らすが如き動物的の所爲は、士君子の大に賤しむ所也。貴婦人に在ては殊に然りとす。腹立つことあるも妄りに怒鳴らず、悲しきことあるも妄りに泣かず、人を罵らず、人を嘲らず、人の悪口言はず、時に笑ふことあるも、はゝと笑聲をこぼす位にて、大口開いて、げた〳〵と笑はず、暑さ堪へ難きも妄りに肌を拔かず、夫が酷なれどとて、僻み根性を起さず、夫が佛性なれどとて、付けあがりて之を尻に敷くことなく、優美に、可憐に、一に女の道を守りて、よろづ女らしきを要す。とりわきて夫に對してはたしなみの深きを要す。心のたしなみは言ふも更也、身だしなみも亦大事也、伊勢物語に「さて、まれ〳〵にかの高安に來て見れど、はじめこそ心にく〳〵もつくりけれ、今は打ちとけて、髮をかしらにまきあげて、おもながやかなる女の、手づから飯匙を取りて、けこの器物に盛りけるを見て、心憂がりて行かずなりにけり。」とあるを見よ、一概に業平を輕薄といふべからず、李夫人病みてまた漢王に見えず、一生

素顔を夫に見せたる事なき女もありきといへり。髮も、衣服もそれ〴〵身分に應じて、たしなみあるべし。朝などは夫に先つて起き、髮を櫛り、眉を畫き、臙脂をつけ、白粉を施し、以て女らしく粧ふべし。蓬頭亂髮、帶も結ばず、紐のまゝにて夫に對するが如きは、これ夫を敬する所以にあらず、又夫を愛する所以にあらず、さればとて、おのれは江湖の貴女に向つておしやれをせよといふにあらず。朝から晩まで、仕事一つせず、臺所の世話せず、化粧にのみ心を凝らして、鏡と相對し、帶を何遍取り替へたり、簪を何遍取り替へたりなとするは、是れ決して貴女の貴女たる所以にあらず、おのれは身だしなみをせよといふ、おしやれをせよと云はず、身だしなみとは身分相應に女らしく粧ふこと也、おしやれにはあらざる也。されど、身だしなみは末也、心のたしなみは本也、綾羅錦繡を纏へばとて、それが貴婦人なるにあらず、學問詩歌管絃に長ずればとて、それが貴婦人なるにあらず、貴婦人の貴婦人たる所以は全くたしなみあるに在り、貴婦人たるもの、たしなみ無かるべからず。

試みに問はん

坂本三七郎

試みに讀者諸孃に問はん。炎陽八月の天、何を以てか暑を避けん。山紫に水明なる邊、靜かに溪聲を聽て之を避けんか、將、香山の幽を尋ね、函嶺の邃を探り、靈泉に浴し、涼棚に座して之を避け

んか、是れ大に可なり。然れども讀者諸嬢、豈悉く之が清遊快適の事を爲すことを得んや。或は一家經理の任に當り、或は育兒敎育の職に在り、或は又一身勉學の責を負ふあり。然らば則ち午下暑漸く加はり、紅塵熱を煽する時に於て、氣倦み體疲るれば、北窓に座して綠陰深き邊、竹風松濤を弄して、僅かに涼を追ふに過ぎざるべし。暑を避くる道は異なりと雖ども、其涼を掬するは一なり。是に於てか、吾人は更に諸嬢に問はん。避暑の事は即ち善し、消閑の具果して何を以て之を充てんとするや。點茶か、挿花か、將た弄琴か。是れ皆可なり。然れども諸嬢消閑の具は多くは此にあらずして。彼の所謂小説なるものを愛讀するを知る。幾旬の避暑消閑の具、小説を讀むこと果して幾卷其益を得る果して幾何ぞや。

梅暦を讀みて千古の傑作と稱し、小三金五郎の癡情を愛して泣く者あるを知る。未だ古來烈女貞婦の傳を讀んで、泣く婦女を見ず。吾人は曾て女鑑に於て、情涙の一篇を草して、情に正邪の別あり。讀者諸嬢は情の正愛の誠に出んことを望みたりき。知らず、消夏六旬の間、諸嬢は情の正しきを養ひ得たるか。將た何等の情涙を澆ぎたるか是れ吾人が殘暑稍く微にして、秋風城墟に入る時に於て諸嬢に問はんとする第一義なり。

明治の文學は、決して幕末澆季の文學と同じからざるべからず。故に今日の小説は梅暦一派の種にあらざるべきは固よりなりと雖ども、吾人の目より之を見れば其小説の下卑にして淫猥なる、春水

西鶴一派の著者と異なるなきを如何せん。小說は社會の反映なりと稱し、世態を寫して世を警醒する者なりとは云へ、今の小說家は現實の世態を寫すにあらずして、之を煽し之を皷し、少年少女をして、相背ひて情波淫風の中に溺れしめんとす。當時の小說家、或は名流大家多からん。然れども概、是れ纎細微巧の流、卑猥の情を寫すに淫猥の筆を以てす。而して某一派の小說家、最も世を害し俗を壞るを見る。此等の小說をして貴女令孃の間に讀ましむ、吾人は其芳心を傷け、之を邪蹊曲路に誘ひ去るを知る。今日小說の世を害し、風を破るとは豈獨り吾人のみにあらず。識者の認むる所なり。

是が爲に、吾人は獨り諸孃に問ひ、且つ戒しむるのみならず。幷せて其父母に向つて、教育上是等の害をして愛孃の身と相遠ざからしめんことを望む。金五郎は今の遊冶郎なり。小三は多情の妖婦なり。然るに今世名を變じ題を替て、何小說と云ひ某小說と稱すと雖ども、其實は一片の痴情を寫すに過ぎず。今の小說家は小三金五郎の忠臣にして明治令孃に於ては毒邪の魔神なるを知れ。男女交際自由結婚の弊は、是等小說家實に其俑を作るに始まる。知らず、何人か吾人と嘆を同うするや。然りと雖ども、吾人は今世小說なる者の弊について論ず、彼の所謂高尙なる美學上に於て論ずるにあらず。一の科學として講究するに於ては吾人固より之を賛せん。只だ今の小說家は美學の末に馳せ、弊に陷るを惡む、吾人は固より歌學を解せざ

る者なり。曾て古歌を見るに、

なにかそのなのたつことの惜からん
知てまどふはわれ獨りかは

此等の歌は歌學としては妙なる者ならん。唯だ吾人は今日小說家の單に此等の歌意を敷演流盪して其弊を世に流すを嘆ず。讀者諸孃吾人の說を讀で、以て如何となす。吾人の忠言をして藥籠中の一味となさむ、幸甚々々。九月某日梧桐庭前に落る處に草して一篇を寄す。

女子敎育一班（三）

三輪田眞佐子

女子敎育なるもの、果して、斯の如き、意義を有つものとせんか、その一朝一夕に、理想にのみ委ねて、創設する敎育制度の成効せざる、或は單に、他國に摸擬する敎育法式の結果、世人を滿足せしめ得ざるは、怪むに及ばじ。苟、わが國に適當し、且つ善良なる女子敎育を行はむとならむ、日本帝國の女子なる概念を基となして、此の國情に適合するものを撰まざるべからず。以下わが國情の如何なるものなるかを略說せん。

伊勢のよみ給ひし國詩に、（春霞たつを見すてゝゆく雁は花なき里にすみやならへる）、と以て敎育はその國の風土に適はざるべからざる譬となすに足らん。そも〳〵春色動きて、新柳烟に和し、桃花唇を開くころ百鳥幽谷を出で、飛つ歌ひつ、風光を樂み、蝶さへ翩々と花間にあくがれ、身の夢なるを忘るゝばかりなるに、北海萬里悲風颯々た

る常世の國に去る鴈は、果して何の心ある。これ等しく鳥なれど、聊か天性に相違あれどころ。あはれ數ならぬ鳥だにかゝる差別あるものを、いかでか人に差別なかるべき。蓋、この理勢に由りてなりけん、わが國は開國以來二千五百餘年間、國体風俗人情など固有特色の格性存すめり。これぞわが國の國情なり。

されど、女子敎育は、わが國体と一致せざるべからず、わが國民は、萬世一系、天壤と共に窮なき、かしこき大君をいたゞき奉り、恒に忠實を勤むるを以て本分となし、能く祖先を崇敬するなり。之に準じて、親に孝を盡し、夫に貞を致し、兄弟相睦しく、朋友相信じ、施いて一國和氣藹然たる美風をなすなり。焉ぞ朝に部落の勢力に由りて、君位を占め、夕に徒黨の歡心を得て、主權を有ちし君主の配下にある外國の臣民と同じ觀念を懷くべけんや。されど國家精神の基なる女子敎育は、必、國体と一致せざるべからず。若しさからざれど、あはれわが瑞穗の國の美風も、草葉の露と消ゑ果てん。

近頃は、女子も種々なる文を讀み、色々なる說などを聞くを以て、女子及び女子を敎育するもの社會主義と國家主義との區別利害を明にせざれど、敎育上に大なる影響を及すならむ。さて社會とは、單に人の集りて、生存する狀態を指すものなれど、國の東西を問はず、自他を別たざるなり。國家は人民互に氣脈を通じて、區域ある一團結なり。故に社會主義は、各自の便益を主とし、國家主義は

一國の公益を貴ぶ。茲に於て教育にも個人主義と、國家主義との區別を生ずあり。されば、社會主義の教育は、博愛を説きて勢ひ國家には。冷澹ならざるを得ざるを以てわが國の如きは、國体上國家主義を採らざれば、國の尊嚴を滅せんかし、今日女子教育を以て任ずるもの、心せざるべからず、元來女子は感情に富むを以て、宗教的教育は大に感化し易しといへども、わが輿論の許さゞるは、多く宗教的は社會主義なるを以て、我國体に戻るに由るならん。思ふに、諸孃の祖先誰か皇國の恩德を蒙らざりしものあらん。志かるに皇國を思はざるものあらんには、人とやはいふべき。なほ孃たち、長へに祖先の墳墓を清め、且つまたわが墳墓にも、春艸を生ずることなからしめんとならば、國家主義の教育を受けざるべからず。古來わが先哲たちが、老莊の學派を排し、淸談の學風を好まざりし所以のものは、自個の快樂を主として、國家の利害を考へざればなり。今人鑑みざるべけんや。

況して、我國は四圍悉く海なれば、わが將來は茲に卓立して、威德を宇內に輝さしめざるべからず。由て未來の海國兒、軍國童の母たるに適する思想を、女子に與へざるべからず。もし女子國家の形勢に適する教育を享けざらんか、國家のため笑ひて死する男子を育て得んや。加之教育は人をして完全なる生活を得せしむるためのものなれば、その國の人情及び風俗などの害なきものとは、全然一致すべきものなり。例之ば我國の人は忠孝

の情に切なり、彼の國の人は博愛の心を尊ぶ。わが風俗は慇懃なれど、彼は冷澹なり。わが女子は謙譲の習あるに、彼の女子は不遜の体あり。その他に國相異なれど、自然人情風俗の相同じからざること、多きはさもあるべきものなり。然るにこの理を思はで、女子敎育をなしたれども、現今敎育せられし女子たち、多くは冠婚喪祭の禮に戻り、風姿動作宜しきを得ずなど、世望あしくして、近くは一身の幸福を得ず。遠くは邦家の光榮とならざるめり。これ豈、敎育の素志ならんや。

史談

小々等少女の事

壚井ふく子

荒き磯わの海士といへど、あらなみを凌ぐ鰐の如く、鮫の如く、鯨の如く、天の道、地の理、人の道理をも知らず、あやしきおそろしきこはきすさまじきもの丶如くにおぼえて、人の數にもかずまへぬ人のみ多けれど、中々に、さむかりおそろしき獸のたぐひむかりにてもあらず。荒き磯をこえ、烈しき瀬を渡りても、心は水のごとく清く、行ひは潮の如く進退よく道ある者も少からず。

むかし 允恭天皇の御世に、阿波の國、長邑の磯に住める海士にて、小々等子といふ少女ありしが、常にはあら浪を潛り、鮫鯨をも凌ぎて、あらきかつぎの業をも爲し居りしかど、心はいとゞ柔しく

淸く潔ぎよく、大君の爲め、夫の爲め、浦人の爲め、よく民の道、妻の道、女の道をもつくして、盛りの花の身をも惜します、潔ぎよく底の藻屑とちり果てたる、誠になみ〱ならぬ花の少女にてありけり。

允恭天皇、御位に即かせ給ひてより、十あまり四歳と云ふ年の秋の暮れつ方、一日淡路の島に出でさせ給ひて、御狩をもなし給ひぬ。淡路島山の秋の暮、散るも殘るも面白き紅葉が木がくれ、靡けるもしをれたるもゆかしき荻かるかやの袂に、此方彼方鳴く鹿兎などの聲々頻りにきこゆれど、狩人はけふこそ好き獲物にて、天皇が御心を慰め奉らめと思ふ心は、いづれも劣らず。手に手に弓矢とりかざし、鉾うちふりて、四方より聲をあはせ勢を合せ、頻りに射つ衝きつかりたつれども、如何にかしけむ、猛けき類はいふも更なり、弱き類だに、一匹も捕らへ得ざりしものから、天皇は、いとど本意なく思召給ひて、朕けふ此の島に出でて狩せむとおもふには、元より、弓ひきてはならびなき射手と、鉾とりては上なき上手とを撰らびて、かく狩りするに、毛のあら物にご物、獸の鳴く聲は、數多きこえながら、鹿一ッだにえとらぬといふは、朕が力の必ずや及ばぬ所のあればにやあらむ。口惜しき事やとて、うちながめ給ふに、獵男等も、いとゞ面目なくおもへど、いかにもなして、何にまれ、せめては一匹なりと捕らへて、叡慮をなぐさめ奉らむとおもふ矢竹心の一筋に、野山を駈けめぐり、踏みしだきて、必死となりて

狩り立つるに、いつしか日も暮れ近くなるに、なほ一をも捕らへ得ず。

天皇は、いよ〳〵御本意なくおぼしめし給ひ、こは必ず朕が身に、何かの過ちありて、神の禍を以て知らせ給ふにやあらむとて、直に卜部をぞ呼び出で、考へさせ給へば、此の淡路島の神、卜部に託宣して、のたまはく、今日　天皇の御狩に、獲ものひとつだもあらぬは、これ皆わがなす業なり、天皇もし我心を慰めむとおぼさば、赤石の海の底に、大なる眞珠あり、そを取りて我にまゐらせられよ。さらば、山中の獸類、あます所なく獲られむとのたまふに、天皇はかしこみたまひて、さらばとて、直に所にあらゆる海人どもを召し給ひて、海底にある眞珠を取り來れと仰せ給へど、名にしおふ、深き海の底なれば、皆面を見合せて、かしこまりたるのみにて、おのれ潜らむと云ふ人も、取り奉らむと云ふ人もなし。そが中に、心猛き者、君が御言のかしこさに、勇氣を皷して、一人り二人りは、試みたれど、皆浪のあらきと底の深きとに苦るしみて、やうやうに岸にうかび上りて、生きたるけしきもなげなり。

天皇は、いとゞ甲斐なく思召し給ふに、一人の海士のいふやう、阿波の國なる長邑の磯に住める男狹磯といふものゝ妻なる少女に、小々等と呼ぶものゝ侍べり。それころは、世にたぐひなき潜ぐ業にたけたるものなりと奏するに、天皇はきこしめし給ひて、悦び給ふこと限りなく、直にその少女をぞ召しよせ給ひて、神の託宣をきこしめさせ

給ひて、汝今より速に海に入りて、その眞珠をとりこよと仰せ給ひぬ。

上なき　天皇の御詔のかしこさに、少女はひれふしたる首を、もたげあへず、かしこみ奉りぬとて、うけたまはりて、御前を退き、海の中へと飛び入りたり。唯さへ底しれぬ大海原、折りしも秋の暮、浪は荒らく、潮ははげしく、磯をも瀬をも、くだかんばかりなるに、人々は安き心地せず、樣子いかにと、手を握りつめ汗をしぼりて、ながめたるほどに、少女はからうじて上り來り、たえだえなる聲していふやう、君の御言なれど、何處までもと思ひ候てやうやくに底に達り、其處此處と尋ね侍り候へど、仰せ給ふ眞珠とおぼしきもの見えず。唯いと大なる鰒のありけるが、其のめぐりは、いとゞ光り輝きて、おそろしきことといふばかりなく候が、誠に大君のゝ給へる眞珠とやらむは、必ず彼のものゝ中にこそあらめと思ひ侍りぬ。大君の仰せなれど、如何にもして、とり奉らむと思ひて、手を懸けて候へど、岩のごとくに候て、動きもやらず。所詮妾ばかりの女子の力にては、上げむこと、かなふべくも覺え侍らず。願くは、力ある異海人に仰せさせ給はれとて、遙かにきこえあげ奉りしに、　天皇は、しばしうちあむじ給ひしが、やありての給ふやう、流石にその業に長けたる汝なればこそ、さばかり深き底をば、委しく見て來しなれ。汝を措きては、又外に潜ぐ人はあらじと思へど、是非にとりてこよと、仰せ給ふに、少々等子は、いよ〳〵首を地にすりつけ、誠に大君の

仰せをかへし奉らむは、返す〴〵も、ゆゝしき限りに候へども、身に叶はぬ事にて侍れど、是非無きに、あはれ許るさせ給ひてといふに、天皇はきゝ入れ給はず、やゝけしきだち給ひて、兎にも角にも、朕が頼むなり、取りてこよ。叶はぬまでも、今一度沈みて、是非に取りてこよ。さなくて、所詮取らじ入らじといなまむには、汝が夫なる男狹磯をも殺さむとのゆゝしき御言葉を、少々等子は聞き奉りて、思ふやう、彼の鰒取らむは、誠にわが力の及ぶ所にあらざるも、強ひていなまば、大君に背き奉り、且つは、夫をも殺す不忠不貞の者となりなむ。大君の爲め夫の爲めなれど、我が命の何惜しからむ。我も神國の民、いで叶はぬまでも、神にさゝげむといふ眞珠とり奉らむ。いでいでと思ひつゝ、誠に一度なりとも、大君の仰せに背き奉りしは、勿体なき我があやまちなりけり。許させ給へといひながら、千尋の繩をば腰に帶びて、底知れぬ海の中へと、またも飛び入りたり。浪はいよ〳〵荒く、潮はます〳〵烈しく、いよ〳〵磯をも岸をも碎かむばかりなり。程へても、少々等子は浮び出でず。偖は、いよ〳〵力及はず、藻屑となりはてしにやとて、人々は、われと手を握りかため、息をこらして、若きも色なく、老いたるは眼を閉ぢて、唯佛の御名唱へなどす。われたる浪の、いよ〳〵たけるよと見るほどに、少々等子は、身もよはりはて、魂ひも消ゆかへりたるものゝごとくにて、大きなる鰒をば、からうじて抱へつゝ、纔に浮び出で、鰒をば岸に上げむとせし

か、力既に衰へ、心にもまかさぬに、心なき荒浪は、ます〱狂り猛ひ、頻りに岸へとおせる、小小等子をひき包みて、是非に沈めむとおせるごとし。

小々等子は、最早かなはじと思ひてにや、いと細けなる眼を見開きて、僅に大君および夫の方を見送りて、さきくおはせさきくませと云ふ如きさまして、遂にそのまゝ眼をも閉ぢて、千尋の底に沈み果てたり。併るに、小々等子の赤心は、なほ波にや殘りけむ。一しきりうちよせし浪によせられて、鰒ばかりは、岸にぞ上りける。

さて、其の鰒をさかせ見給ふに、大きさ桃の如き眞珠のありたりしかば、天皇の御悦びは限り無きものから、また小々等子の、稀れなる節義を感じ給ひ、さばかりゆかしき花の少女を、あたら返らぬ波に散らしたる事をば、嘆かせ給ふ事大かたならず。工に仰せて墓を造らせられて、懇にともらはせ給ひて、且ッ小々等少女の功によりて、阿河の國の年貢、三年が程のぞき給ひしと云ふ。我が兄君の友なる大町桂月子が、此の頃帝國文學に載せられたる波の花といへる新體詩も、やがて、こを歌ひたまへるものなり。面白ければ、同氏に乞ひて、許容を得て、此處に記し、我が筆の面白からざるを補はむとす。

波の花　　大町桂月

淡路島やまおきふけて、散や尾上のもみぢ葉を、
踏み分つゝも妻戀ふる、鹿のなく音もあはれ也。
八重の潮路を吹すさび、身に浸み渡る木枯しの、

梢をはらふおとすごく、濱の眞砂もむせぶなり。
さらでも荒き海はらの、すさぶ嵐にわきたちて、
霰とみだれゆきとちり、烟となりてのぼりつゝ、
よりては返り返りては、又も寄りくる海つみの、
波は何をかもとむらむ、みるめだになき荒磯に。
みけしの袖をふり延て、かりにたゝせる大君の、
おましの前に額つきて、うやまひまつる島人の、
心のさまにひきかへて、浪は荒くもなりまさる。
やよや手弱女近う寄れ、汝を呼びしは外ならず、
こたび都をたちいでゝ、とるや梓のたつかゆみ、
晝はひねもす駒なめて、野暮山くれ狩りにしを、
毛のあらものも和物も、尾上によばふ聲はして、
手には取れぬ月の中の、桂のごとくおもはえて、
日數も數多經にけれど、絶えてなかりき山幸は。

いと訝かしく思ふまゝ、卜部を呼びて卜へさす、
久しき世よりこの島に、いませるかみの御心を。
ひごろ山幸なかりしは、皆我が崇るわざになむ、
そをさけまくも思さむ、さぐらせたまへ水底を、
おとに聞えしこの海の、底にあはびの貝ぞある、
かひの中なるましら玉、とりてそなへよ幣帛に、
わが心だになぎぬれど、おもはすまゝぞ山幸は。
神の敎へはありたれど、底も知らぬわだつみの、
荒れたる浪をかき分て、かづかむ者も無りしを、
男狹磯の妻なる小々等少女、潜く業にも勝れしと、
島人どものいふなべに、汝をこゝに呼びにたり。
けふの生日のみい杯に、さゝげ奉らむましら玉、
そのましら玉探てこよ、日影の高くさゝぬ間に。
畏まりぬといらへつゝ、君の御前をしりぞきて、

ぬぐや一重の麻のきぬ、　玉をのべたる和はだも、
あはれ嵐に冷え入りて、　顏さへあをく粟だてり。
あやにかしこき大君の、　みことは重く身は輕く、
飄へすよと見るほどに、　姿はなみに消えにけり。
いよ／＼強く吹く風に、　冲のしら波さきたちて、
霰とみだれゆきとちり、　烟となりてのぼりつゝ、
よりては返り返りては、　又も濱邊にうちよりて、
いはほに咲くや浪の花、　空をどよもすもの音は、
百いかづちのひと時に、　落るがごとく覺ゆなり。
いろべにつどふ島人の、　老も若きもれしなべて、
小々等少女よ幸くあれ、　聲さへ浪に消え入りぬ。
かたみに顏を見合せて、　心もとなく待つほどに、
逆まく浪をかきわけて、　浮び上りぬたわやめは。
千尋に餘るわだつみの、　底にあはびは在たれど、

いとゞ大きくまた重く、　いふがひもなき女子の、
よわき腕を如何にせむ、　許させ給へと伏し沈む。
神のとめますましら玉、　いかでか海に殘すべき、
よしや重くは有とても、　いざとりてこよろの鰒、
猶否みなどまのあたり、　打も果さむなが男狹磯。
君のみ言のかしこさに、　數にもたらぬ賤が身は、
よしや藻屑と成ぬとも、　をつとの命は救はゞや。
さらばと計り答へつゝ、　夫をひと目かへりみて、
又もかづきて沈みけり、　わきたつ濤の底ふかく。
風はいよ／＼吹しきり、　波はいよ／＼あれ行て、
空にしきたつ潮けぶり、　ゆきとくだくる磯山に、
またも寄り來る白浪の、　寄ては返りかへりては、
頭をなめてくられかみ、　たけり狂ふが如くなり。
いろべにつどふ島人の、　老いも若きもこゝろ共に、

小々等少女よ幸くあれ、叫び呼ばゝる聲の中に、
やまよりたかき大浪の、勢ひつよく打ち寄せて、
眞砂の上にあげにたり、鮑いだけるたわやめを。
息も通はずなりたれど、眼ばかりはうちひらき、
邊り見廻すかんばせは、浪を欺むくばかりなり。
我がせの君や幸くあれ、たゝ一言を名殘りにて、
またもひきゆく大浪に、聲もろ共に消ゑにけり。
君のとめさせ給ひたる、玉はあげゝり陸の上に、
世に麗しきたわやめの、匂へる花の身に換へて。

永井氏の女のこと

永石薫風

名を何とかいひたりけん傳はらず、むかし永井といへる家にひとりの女ありけり。年十五にして渥美氏に嫁ぎぬ、うみの父永井氏は祿さはにたまはりて、一城の主たりければ女もかけたることもなくて世の憂さもしらで生立にけり。さるを夫は俸いとうすくて家のすぎはひゆたかならず。されば きのふまできなれつる絹の衣ぬぎすてゝ木綿の衣をつけ、なにくれとなく萬かざりをれとし、費をはぶき、もはら節儉を守りて、家のしりへのまつりごとをとりをさめけり。さがいとすなはしてたゞしく、たちゐふるまひよりはじめて何事にもつゝしみふかくして、みだりならず、つねにものいふことすくなく、婦たるにふさはしき德をそなへたる人なりけり、夫につかふること禮ありてさながら賓客に打むかへるが如し、世其行にかまけてほめたゞへざるはなかりけり。かくていと睦く

打過しつるを十年ばかりへて後夫渥美氏はふと病にかゝりぬ、されど夜晝となくかたはらをはなれず。くすりをすゝめ身をさすりなど心をつくし身をくだきておつるくまもなかりけり。さるをいかなれば天よはひをかさずして、遂にあへなくもなきよの人になりにけり。婦かなしむことかぎりなく、身やせ、すがた衰ふるまでなきなげゝども、まかれる人いかでか、かへりきぬべき、と今は思ひかへして、はふりのことゞも、もるゝことなくいとねもごろになしをへてけり。さて後も靈を祭ることおりしよに事ふるにいさゝかもことならず。かくて年月をふるほどに、婦の兄なる某、再び他の家に嫁かしめんとして、いひけらく汝年まだ晩からず夫は既にみうせ、家もとめりともあらず、さるを何を慕ひてかをしき一生をようもなきところにはてんとする、とてしふれども、婦は女たるもの一たび嫁ぎてなどか二夫にまみえんや、家の富めるまづしきは身にさだまれる分なり、これによりていかでか操をかんやとてきかず。兄はますく〵いかりて、はては親族のものどもを集へて相謀りて、このことを果さんとしき。婦は今はとや思ひけん一室に入りて、刄にふしてしなんとしけるを、婢このさまをあやしみて、走りよりてをしとゞめき。人々も皆來合せ、兄も其志の奪ふべからぬをもて此事遂にやみにきとなん。さて後も固く貞節を守り子をもよく敎へたてゝ年まだ四十にも足らぬにをしくもみまかれりとぞ。

家政

活花（第五）

田邊和氣子

もゝ草の花のひともとく秋のはじめ、いとはやも、咲出たるはまかきのもとの女郎花なり、あだなる名には立てれど、いはぬ色香に、露をふくめる朝ぼらけ、さと吹くる風になびくものから、忘れぬ操ぞ又たとしへなくぞゆかしかりける、こを手折て瓶にさし給ふとも、花の名におふ君達なれど、誰かはあやしと見るべからむや。さはいへ一種どかりは、はかなけれど七種の數にはあらねど、いかなる草のゆかりならむ、桔梗の花のはゝゑみて咲たるは、何となう見すてかたけれど躰



に加へ給へねかし、さても女郎花は、花のもとに、前後左右へさし枝を生じて、咲ものなり、この小枝打重りて、十文字にならざる様に、活給へや、數は瓶の大小によるものなれど、まづ五本斗りにてよからむ、躰に添る桔梗も三本又は四五本をさして、花の數は半にし給へ副の下へ小枝は出し給

ふなよ、また躰は桔梗にかぎるものにあらず、折に合ひたる花ならむには、なるをも用ふるなり、さはいへ色のとり合せにてこゝろを添給へかし。

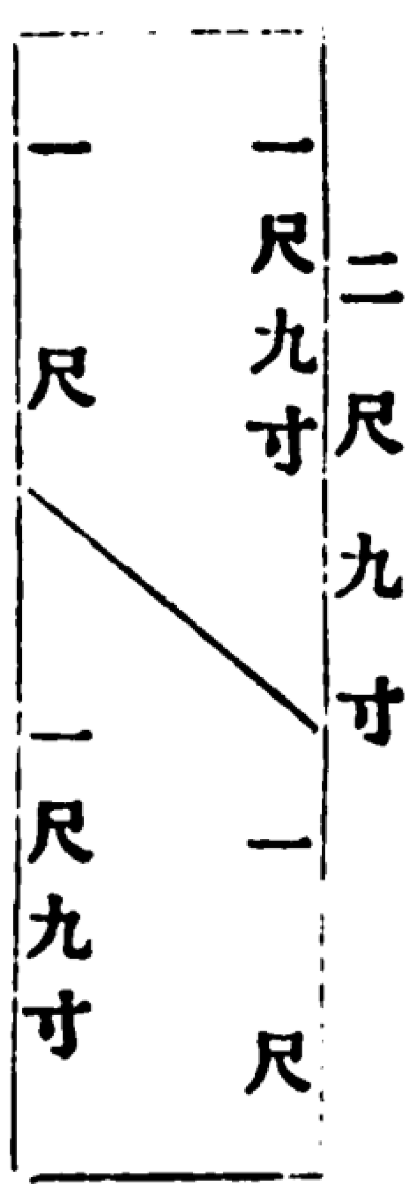
女ちゑ袋

西山たい子

一ッ身及び三ッ身の襦袢の裁ち縫ひの一條りは、前回に記したれど、今度は衣服の方にかゝらん。故に、一ッ身は、並なるは布九尺あれど出來るなり。故に、一反二丈七尺ばかりなる並の反物にては、三つまで裁つ事を得るなり。又木綿巾も、いろ〱あれど、並なるは大凡そ九尺五寸ばかりあるものなれど、此處にはそれを用ゐぬ。此巾に、少しは、ちがふものありとも、此の割り合ひに習ひて、よきやうに各の心にまかせて裁つべし。

（五）　一ッ身の裁ち方

一ッ身の袖丈は、大凡そ一尺二寸なれど、其四倍ぶり即ち四尺八寸だけを、襦袢の如くにして裁ちとり、先づその方を置きて、九尺の物より四尺八寸の袖だけとり去りたる殘りの四尺二寸なる方を、身衣となすなれど、襦袢を裁ちし時の如くに、縦ど横とを眞二つに折り、襟方を八分だけ切り、前となすべき方を裁ちて身衣となすべし。さて、それよりさきに袖丈だけ取り置きたる方をとりあげて、袖、及び、衽、襟など裁つなり。其裁ち方には二種あり。巾を廣く裁んと思はゞ、先づ袖巾六寸だけを、襦袢の如くにして取り、殘りたる三寸五分ある方を、一尺九寸だけ、丈の内よりとり、それを縦に眞二つに切りて、眞中にてはぎつけて、襟となすなり。殘り二尺九寸あるものを、筋かひに此の下の圖の如くにして裁つなり。



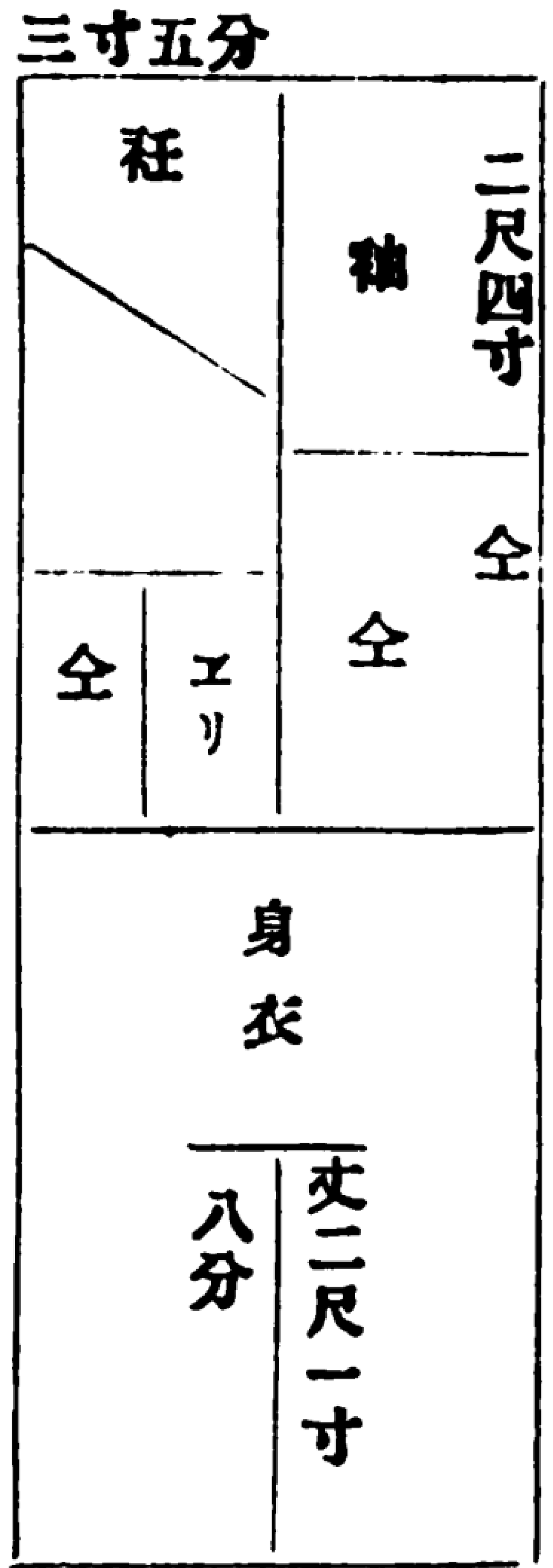
かくの如くにして、衽をば裁ちしを、か

ぎ衽と云ふなり。左の二圖の中の、前圖なる方を、よく見合すべし。

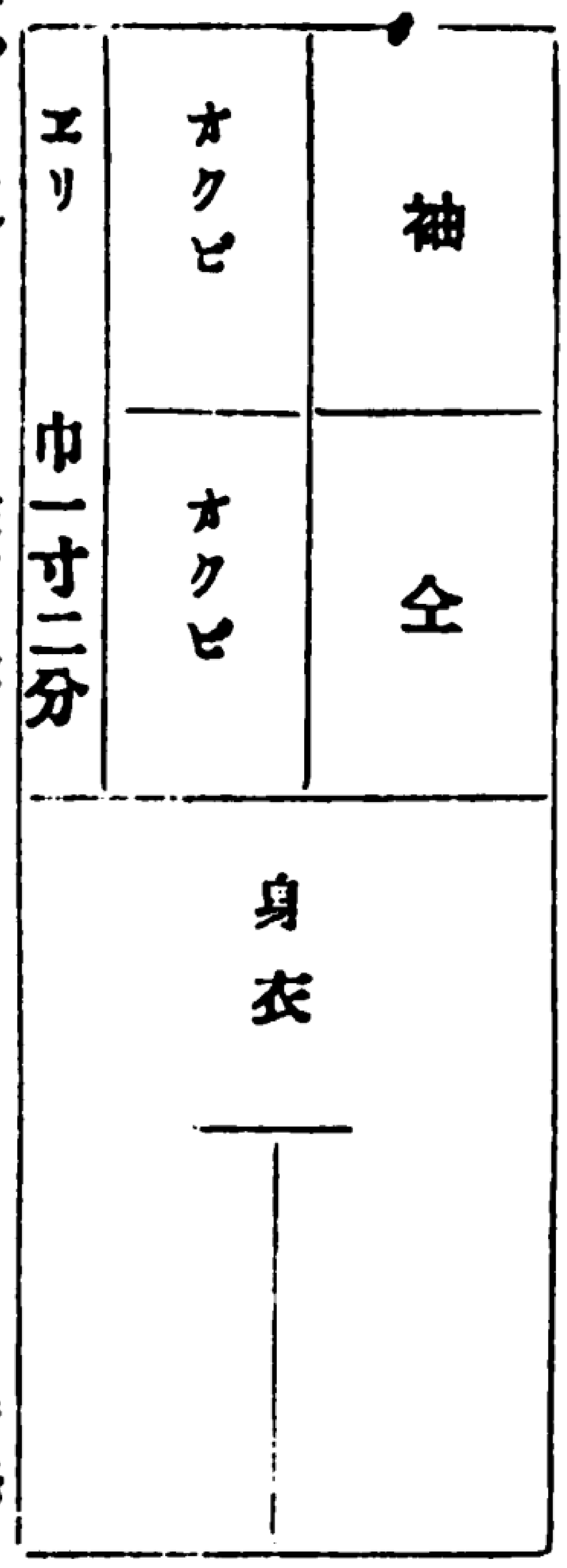
又巾せまくてもよしと思はゞ、袖巾を五寸になし、殘りの方より、襟を巾一寸二分だけにしてとり、又其殘り三寸三分あるものを、二つに切りて、衽となすべし。

かくの如くにして、裁ちしをばう衽と云ふ。よく二圖の中の後圖を見合すべし。

一ツ身裁ち方の前圖



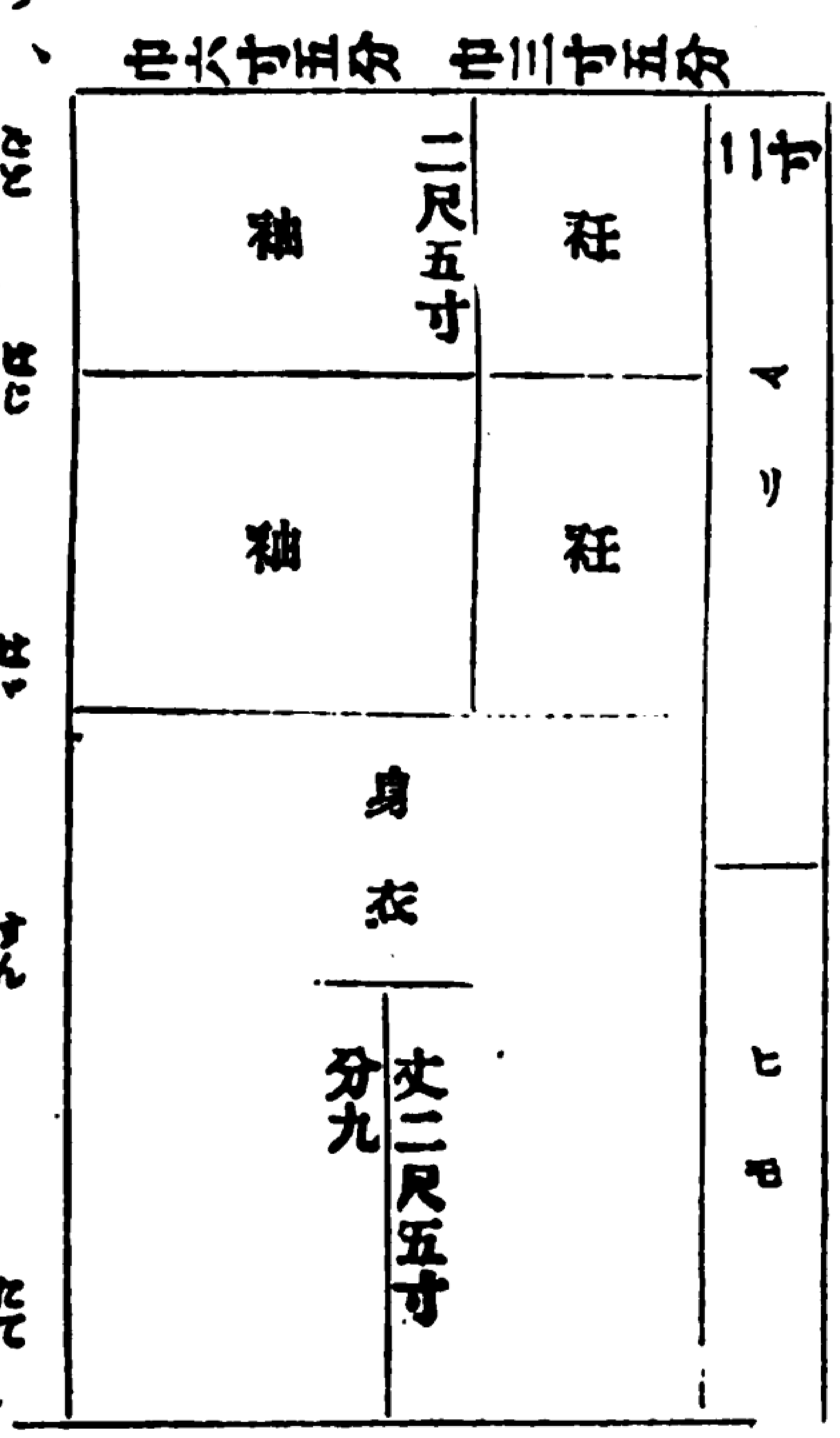
同後圖



但し桃色[illegible]などの如き巾のせまきものは、前圖の如く、衽をかぎとなし、袖巾をもせまくなしおくより、外に是非なし。

習ひ初めに、縮緬などは、むづかしくて、無理の如くなれど、序なれど、縮緬中巾物一尺二寸巾あるもの丶裁ち方をも、此處に記しおかん。一ツ身の並なるは、九尺にて裁つなれど、少しよろしきものは、一丈にて裁つが、昔よりの定めなり。

縮緬中巾物の裁ち方の圖



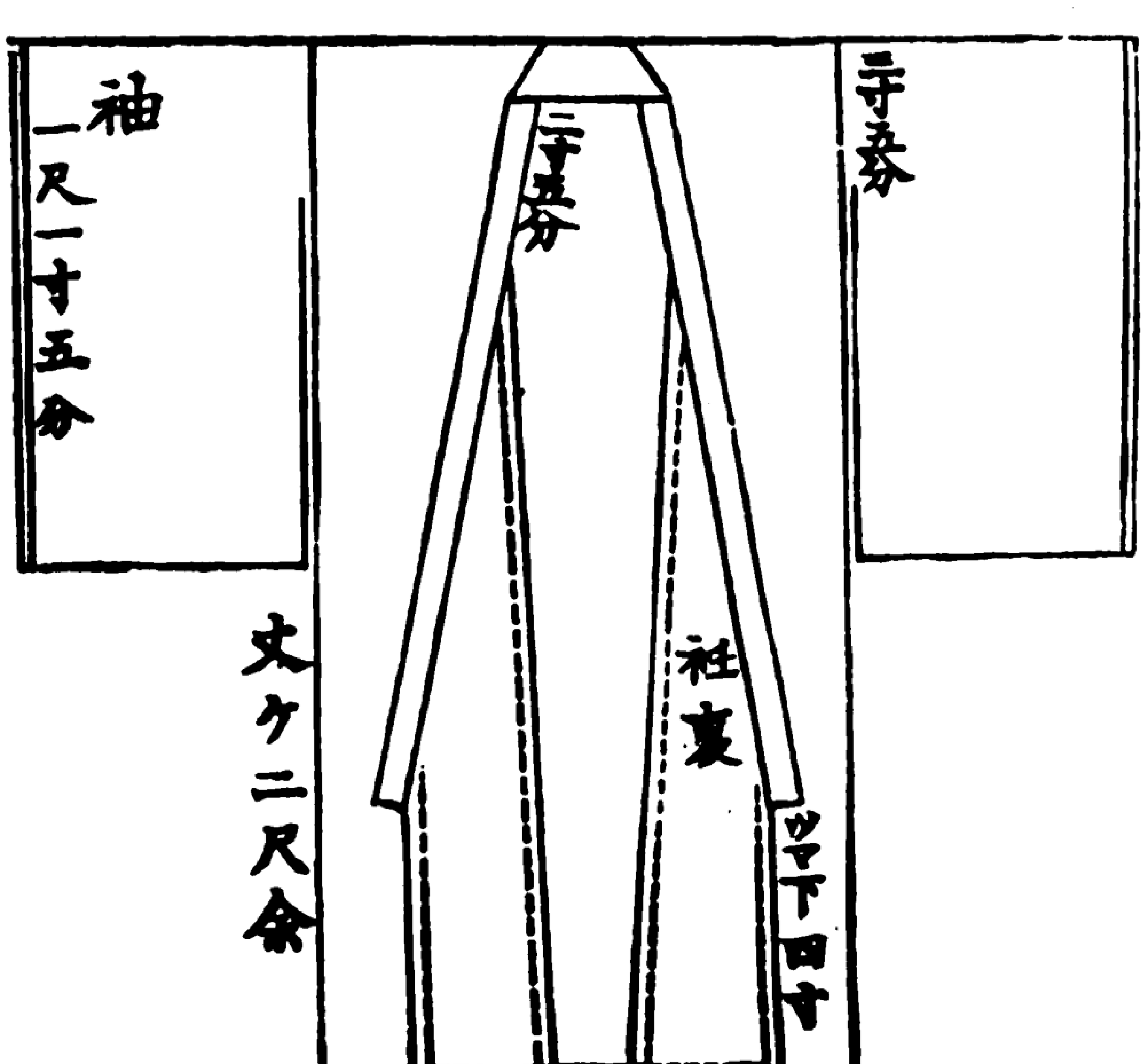
まづ圖の如く、初めに、巾より二寸だけを、縦に眞直に長くきりとりて、襟りひもとに成すべし。さて、殘りなる巾一尺あるものより、袖丈を大凡ろ

一尺二寸五分の四倍なる五尺だけを、例の如くにとり、巾をも六寸五分ばかりして、それを袖となし、殘りの三寸五分なる方を、衽となすべし。身衣も前の如くにして、裁つべし。よく右の圖を見合せて裁つべし。よきものを裁つには、幾度となくくりかへし〳〵て、よく〳〵注意して裁つべし。

（六）一ッ身單物の縫ひ方

先づ袖下を、表より淺く縫ひおき、袖口をつけて裏より又袖下を袋縫になし、次に身衣をとりて、兩脇を縫ひ、衽を附るなり。衽を附るには、前の裾の方より襟方まで、針に條をつけて、衽の方をも、少しはすに條をつけ置きて、襟方より二寸五分さがりし處まで、衽をぬひ付るなり。そのさげたる處を、衽下りと云ふ。次に、その衽の端、兩方を、裾の上四寸五分ばかり絎るなり。其の絎たる處を褄下と云ふ。次に裾絎をなし、それより、襟と、袖とを付るなり。袖付は三寸五分が通例なり。よく左の圖を見合すべし。

一ッ身單物の縫ひ上りの圖



だいどころ

鮎（つゞき）　美食散人

たくはへることは

(一)「しほべ」あゆをせわりにして、腹わたをだし鹽漬にす、粕づけにし、又鮓にするなど普通之を用ゐる。

(二)「こゞもりづけ」粕づけにしたるものなり、但し、腹わたをぬきたるのみにて、せわりにせず、且腹の中に、「あはこ」を其まゝに藏す。

(三)「山吹づけ」、鮎の骨をぬき、肉のみにし、「あはこ」にて付けて、かすづけにす。

うるか

うち川の瀬にすむ鮎のはらにこそ
うるかといへるわたはありけり、と

なにがしの帝もながめ給へり、あゆにうるかのあること、只にうぢ川のみにはあらずあゆの腹わたを鹽づけにしたるものを、うるかといふなり。

(一)「しぶうるか」、未だ子をもたぬ已前のわたを鹽にしたるなり、時をふれど、脂うきて、味しぶし、故にかくいふ。

(二)「こうるか」、「あはこ」のみをとりて鹽にしたるもの、味はい美にして、見たるところもよし。

(三)「とりごみ」、「あはこ」も「しらこ」も「腹わた」も共にして、鹽づけにしたるなり。

(四)「とりごみ」に鮎の肉をも入れてうるかとし、之に少し「きなこ」(大豆をいりて粉にしたるもの)を入れたるあり、多くせぬことなれど是もよし。

(五)「にうるか」新しきものを味淋にて煮、ろど粉を少し入れてにつめたるもの、きくらげなど入れたるも亦妙なり。

東京などにて鮎を食ふには

遠路より來るが故に腸をぬきとりて腐敗をふせげり、美濃などにては腸を美味とするが故にまづはぬくことなし、

腸をぬかざる鮎を遠路におくれど焼くとき腹のきる〵ことあり、故に紙をはりて之をふせぐとぞ。

あゆざら

尾張美濃などにては鮎の爲に一種の皿あり、形、長方形にして鮎をのするによし名づけて鮎皿といふ

うなぎ

かばやきのうまみは誰しらぬものもなし、稀には味噌やきにする人もありとか但あまりひねりてうまからぬものなり。

尾張、美濃にては、かばやきにするが如くさきたるものを、味噌すひものにして食ふ、大なるものほどよし、なれぬときはなまぐさきやうにおもへど、食ひこゝろみるに味よし、なまぐさきことなし。

鶏卵料理各種

鶏卵豆腐椀盛、煮出しに味淋の煮キリと食鹽少量を加味し置き、鶏卵を割りて能く攪きまはしたるものに、前の汁を鶏卵貳個に五勺位の割合に混和し、丼の類に移して、其儘蒸籠に入れ、蒸すべし、但し之を蒸す時間は、蒸す品物の量によりて、長短あれど、見計らひにすべし。尤も之を蒸すに當り、注意すべきは、蒸籠の蓋を少しスカシ置くことなり。斯くなすときは蒸したる鶏卵に「ス」の明くことなし。扨て鶏卵を蒸籠に入れたるときは別に煮出しを好き程に鹽梅し、葛を解きて之れに混和し、葛のカヽりたるとき前の蒸したる卵を椀に好き程に盛りて、其上より此の汁を注ぎ掛け、山葵又は摺り生姜一摘を其上に置くべし。但し此藥味は椀の蓋の上に置き、又其裏に置くもよし。

錦鶏卵、先づ鶏卵を湯で、皮を剝ぎ、黄身と白身とを分かち、之を各々別に裏漉にてこし、砂糖と食鹽にて鹽梅し置き、生鶏卵の黄身と白身を各々之れに攪き混せ（湯で卵十個に生卵壹個の割合にすべし）其充分に混和したるを見て、方形の框に

入れ、(白身を下に壓し附けて、上に黄身を置き、又た其上に黄身を漉しつゝ降り掛くべし) 凡そ十分間位、蒸すべし、其蒸せたるを待ち、好き形ちに截りて、口取杯の種とするなり。

別法、湯で卵と生卵の混和したるものを、美濃紙の上に置き、(白身を前きに置き、其上に黄身を置くべし) 之を簾にて海苔卷の如く捲きて、後蒸し、小口より五六分位の厚に切るべし。矢張口取の種などに佳ろし。

燒き附け鷄卵、第一に種となすべきものを拵へ、(折柄なれど、栗松茸、初茸の類と、鳥肉に隱元、又は妙荷の類とす) 能き程に味を附け置き、扨て鷄卵を攪きまはし。煮出しに味淋の煮きりと醤油とを加味して、之れに混ぜ、前の種物を燒鍋に入れて、後ち此の汁を注そぎて、鍋の蓋を爲し。文火にて蓋の上にも少し火を置きて燒くべし。十分間程にて出來るなり。

カステーラ鷄卵、鱚若くは海老の類の皮を剝ぎ、肉を能くたゝき摺鉢にて摺りたるを、裏漉にてこし、食鹽と味淋の煮切にて鹽梅し、更らに雞卵を攪きまはしたるものに之を混和し、(鷄卵十個に鱚三尾位の割なれども、魚に大小あれば好き程に見計らふべし) 再たび摺り鉢にて能くすりまぜ、鷄卵燒に入れて燒き、之を方形に截り、又は簾にて海苔卷の、如くに捲く。其捲きたるものは伊達卷といふなり。

紅梅鷄卵、先づ鷄卵を湯で、皮を去りたるものもを細工紅の解きたる汁に漬け、色つきたるを待ちて、鷄卵を縱に密接してならべ、五本の箸を其五ケ所に當てゝ、上より簾にて捲き附くべし。十分間位其儘におきて、之を小口より、好き程に切るときは、梅花の形に出來るなり。但し湯でたる卵の熱さめざる中に捲かざれば筋つかぬなり。注意すべし。

學園

わが學園（三）

鹽井正男

二、古代の歌謠の形態

前條にかつ〴〵かい擧げたる歌を、一見せられなむ、諸孃の心に、いちはやく思ひ當り給ふ事は、必ず其の語其の句の、長く短く、多く少く、さまざまなる形態を成せる事ならむ。げに語句は、不規則をきはめたり。一と二とに擧げたる二神の大御歌は、僅に五言五言の二句十言のみなれど、三なる仁德の御歌は五言七言七言の三句十九言なり。五言七言五言七言と五句を重さねたる後世の所謂三十一文字の歌多くあなれど、ろが起句の、僅に三言或は四言を以て起して、五言を爲さぬあり。長き歌に至りては、後世の七言五言七言五言の七五の句をつらねたる如きものとは、全く異りたるのみならず、後世の五七調のものとも、其の有樣を異にせり。後世のは、必ず五七五七と句をつらねゆきて、結句は七言を重さねたれど、此の古代の歌謠に在りては、さる規則なく、例へむ、十四なる大國王の御神の御歌、十五なる神武天皇の御歌、十六なる吉野國樔の歌、十七なる雄略天皇の御歌を見よ。三言を以て止めたるあり。四言を以て終りたるあり。八言を以て結べるあり。實にさま〴〵なる形態をなせり。語句の多少、長短、單複の制限といふもの、毫も存せず。自由自在に詠み据ゑたれど、さながら自然にまかせたる山野の草木の如くにて、千姿万態、名狀すべからざる風ありて、一見不思義なる觀せらる。後世の如く、短歌といへど、五句三十一言のみと限りたる如くなれる世より見たらむには、古代のは實に亂雜といふべきけしきあらむ。

古代の歌謠は、實に千姿萬態、亂雜といふべき有

樣に近し。されば、古代の歌謠、決して徒らに亂雜なりしに非ず。其のさまぐ\なる姿をなせるは、深き由來の存せる事なり。一言其の由來を說かむ。

三、古代の歌謠の語句の不規則なる所以。

これ、古代の人は、歌は必ず歌ひたるものなればなり。且ッ、古代の人は、事物を現にうたひたるものなればなり。後世の如く、唯に詞の上の技術となりて、虛しく結構潤色したるものに非ざればなり。古代の歌は、事物に感激して、其の感情の赴くにまかせて、言詞にうたひ出でたるものにて、唯調子だに、耳に面白ければよかりしなり。事物に單純なるあり。複雜なるあり。大なるあり。小なるあり。事物に感じて起るの感情なれば、感情にもまた、單純なるも、繁雜なるも、大なるも、小なるもあらむ。事物單純ならば、感情も自ら單純ならむ。事物繁雜ならば、感情もまた自ら繁雜ならむ。事物大ならば、感情もまた從て大に、事物小ならば、感情もまた從て小ならむ。單純なる心は、自ら單純なる詞にうたはれ、複雜なる感情は、自ら複雜の詞にうたはれむ。さればこそ、古代の歌は、必竟、長短、單複、さまぐ\ありしのみ。決して怪しむに足らざるなり。自然に出來せる自然の結果なり。古代の人は、如何なる歌態を以て、いくばかりの語句を以て、彼が心をうたはむなどいふ考ば、決して無かりし事にて、如何なる形態にても、いくばかりなる語句にても、彼が思ひ起したる情緒の、調子よくうたふを得れば、事足れるなり。故に、語數の多少が如何なれ、句格の長短が如何なれ、さる事は更に問ふ必要なければさる事に心を勞せざりしなり。換言すれば、古代の人の歌ふには、初めより歌形歌態といふものありて、うたへるに非ず。彼が心情をうたひ出で、初めて一種の歌形歌態の成りしなり。後世

の如く、喜撰式、濱成式、孫姫式などいふ歌法歌式ありて、さる制に從ひ、おのれの心情をうたひたる如き事は、決して古代に無かりし事なり。中世よりの人は、歌法によりて歌といふものを作り、古代の人は、心情によりて心情をうたひたるなり。これ、古今の大變を生じたる所以なり。以上のべたる二條の道理によりて、古代の歌謠の狀態、さる不規則を示せるなり。然り而して、古代にはいかめしき歌法歌式なかりしが、さはいへど、雲の如く、霞の如く、あながちに亂雜なりしものにも非ず。古代には、古代たる一種特有の句格語脈ありたり。なほ彼の天然の雨露にうちまかせたる山野の樹木が、其の幹に枝に、園丁の細工したる結搆は無きも、自ら柳枝は嫋々たり、梅幹は兀々たり。梅に柳に、自然に具りたる幹狀枝容のある如し。古代の歌は、必ず歌ひたるものからに、特に結搆せるにはあらぬも、自らに歌ふに叶ひたるやうの句格語脈聲調ありたり。これより、それを取りいでゝ、かいつらねむが、そが前に、古代の歌と中世よりのと、大に異りたる一般の源因に就て、大要を二三言し置かむとす。

四、古代の歌と、中古よりのと、異りたる源因

前の條りにも、一寸いへる如く、古代の歌は、人の心情が、まのあたり事物に感動せしめられて自ら言葉にこぼれ出でたるをいふなり。即ち、眞に其の事物あり、眞に其の感情動き、而して自ら言語に發して、歌といふものに成りたるなり。古代の人の歌へる歌といふもの、皆然り。決して、初めより歌といふものを作らむと欲して、假りに其の事物をつくり、假りに其の情をまねびて、うたひ出でたるものに非ず。現に事物を見聞き、現に感情の起りて、其の情自ら言葉に出でたるなり。古代の歌を見よ。あなにやしとうたひたまへ

るは、二神がやがて眞に現在に、美しと思ひ給ふものわりたまひて、歌ひたまへるなり。また八雲立つ出雲八重垣とうたひたまへるも、須佐男命が、現に出雲の國なる須賀といふ里に、櫛名田姫と共にすみたまふべき宮造りしたまひて、現に雲の上るを見て、うたひたまへるなり。古事記にある歌、日本紀に見ゆる歌、皆然り。悲しとうたへるは、現に悲しみに堪へぬ事ありてよりなり。嬉れしとうたへるは、また現に嬉れしき事のあれぞなり。戀ひしとうたへるは、また眞に戀ひしきいも、戀ひしきせこ、戀ひしき人あれぞなりけり。天皇のうたひたまへるも、ものゝべのうたへるも、民草のうたへるも、皆現にうたふべき事物あり、其の事物を見聞きて、自ら動ける感情の、自ら言餘にあふれ出でゝ、歌と成りたるなり。

されど、古代の歌は、現に事物を詠じたるなり。決して、雪月花鳥虫などゝ、殊更に設けて、心情をつくり出でなどして、うたひたるものに非じ。これ、大に後世と異なれる所なり。古今わたりに至りては、歌は一種の玩弄物となり。遊戯品となり、一種の技術品と成り、初めより歌といふものを作らむと思ひて、題を設け、さて其の題につきて、心を作り出でたり、而して、うたひたり。甚しきに至りては、歌合などいひて、詞華を闘はす事せり。されど、中世よりは、歌は詞をうたふやうなれり。これが故に、古代の歌謠は、よく自然に叶ひ、よく人情に合し、よく適切なるも、中世よりのは、往々自然の外に走り、人情の境を越えて、適切ならず。古代の歌謠は、眞に情を寫し、眞に事物をうたひたりといはむも、中世のは、唯よく詞をつくり、よく詞をうたひたりと許せむのみ。これ畢竟、

古代の歌は、自然に出でたる詠情
中世よりのは、技術に成れる詠情

なればなり。此の二點は、蓋し古代の歌と、中世よりの歌とを、痛く異ならしめたる所以にして、古代の歌の種類、形容、聲調、品格が、中世以降の歌のと、大に異れるは、多くは此處に由來せる事なり。

また、次には、古代の歌は、必ずうたひたるものなる事は、古代の歌の一種特別なる姿を爲したる一大源因にして、其の代の歌の聲調の、何となう流麗なるは、殊にこゝに由來せる所なるべし。

此の二大源因の外には、文字の無かりし事、言語の少かりし事、及び上代の人の思想の粗大なりし事なども、其の代の歌の姿に、蓋し多かる影響を及ぼしゝものなりけむ。

さて、これより古代の歌謠の、自からなる語脈句格の特色をたづねむ。さて後に、其の思想精神の特色をたづねむ。

五、古代の歌謠の自からなる語脈句格

古事記日本紀なる古代の歌謠を通じて、第一に特色なる事は、所謂五七調といふものなり。長きも短きも、皆五七の句調にして、七五とつゞかず。故に

　古代の五句三十一言の歌、所謂後世の三十一文字の短歌と稱するものにても、第三の句にて切れたるもの、結びたるもの、或は息みたるものも、更に見えず。

第三の句の末にて切るゝといひ結ぶといふは、即ち萬葉集なる山上憶良が妻をかなしめる歌、

　いもが見しあふちの花は散りぬべし、
　　わがなくなみだいまだひなくに。

とうたへる如く、或は古今集なる讀人知らずの歌に、

　梓弓おしてはるさめけふふりぬ、」
　　あすさへふらむ若菜つみてむ。」

或は新古今集なる定家卿が歌に

駒とめて袖うちはらふかげもなし」
さのゝわたりの雪のゆふぐれ。
或はおなじく新古今集なる鴨の長明が歌
石川やせみの小川のきよければ、
月もながれをたづねてぞすむ。

などやうに歌へる類にて、「散りぬべし」、「けふふりぬ」、「かげもなし」、「きよければ」と、第三の句の末にて、或は切れ或は結び或は休息めたり。かゝる類の歌は、古事記にも、日本紀にも、一首も絶えて見ず、第三句なる五言は、必ず次の句へ懸れり。休息するといふは、句の切るゝにあらず、語の一寸休息する事にて、第三句の末にて、休息するは、長明が歌の如きものなるが、記にも紀にも、更に見ず。語脈の休息は、多くは第二句なる七言の末、或は第四句なる七言の末にて休息し、稀に第一句の末にて、休みたるあれど、第三の句にては、決して休息せず。第三句の五言は、次に續ける語にして、さなくば、枕辭或は歌枕の類にて、總じて皆下の句へ懸りたり。前回の末に擧げたる所の歌を見たまはゞ、大かた然るを知りたまはむ。なれど、手近に一ッ二ッ繰りかへして取り出でゝ示さむ、

わがせこが來べきよひなり。」さゝがにの
くものふるまひかねてしるしも。」

は、二段落の歌にて、第二句の末と、第五句の末にて、二段落をなし、第三の句は「さゝがにのくも」といふやうに、次の句へかゝれり。また、

やましろの筒城の宮に、もの申す
わがせを見れば涙ぐましも。」
やまとべにみかほしものは、をしのみの
このたかきなるつのざしの宮。」
ちばのかどのを見れば、もゝちたる
やにはも見ゆ國のほも見ゆ。」

などの如く、第二句の末にて、語聲は休息したれ

ど、第三の句は、皆下なる句へかゝりたり。これ、畢竟古代の歌謡は、皆所謂五七調なれど、中途なる五言の所にては、自ら段落も休息も爲し能はざるゆゑなれどなりけむ。故に、所謂五七調は、古代の歌の特色にして、從て第三の句にて切れも休息みも爲さざるも、古代の歌の特色となれるなり。萬葉集に至りては、やゝ此の古代の調に破格を顯はし、柿本の人麿の

東の野にかげろひの立つ見えて、
かへりみすれど月かたぶきぬ。」

の如き類、稀れ〳〵に見ゆ。古今集に至りては、やゝ甚しく成りて、春の部の上の部ばかりにても、廿五六首見えたり。新古今集に至りては、いよ〳〵甚しく、また數ふるに堪へず。而して、古今集以下の長歌と稱するものを見よ、またおなじく七五調と成り去れり。これ古今の一大變遷なり。

前回の末に〇〇〇〇〇とありたるは、荒木田久老といふ五字を落したるなり。また記紀歌解とあるは單に紀歌解とあるべきなり。疎漏を謝す。

漫録

父子の間　故人　小山田與清

父子の間は、一朝一夕の因縁にあらず。されど父慈子孝を教諭せる事、古書の所見擧盡すに遑なし。父子の間を不和になすは、妻妾奸臣愛友の所爲にて、愚父愚子、大にあやまちを生ずる基也。多く彼人の子をそこなふは、惡後妻惡妾惡臣のわざ也。古より惡子慈父を弑せるもの、和漢天竺其所見限なし。又子孝にして愚父にあやまたれしも少からず。晉献公惡後妻に誑れて、孝子申生を自殺せしめ、晉の惠帝賈后の讒言に惑ひて愍懐太子を殺せ

り。されど說苑に父無益の子を愛する事能はず、君不軌の民を愛する事能はずとも見えたれど、一概にはいひがたし、就日錄に不肖の子に三變あり、其初變じて蝗虫と爲り、田園を竊で食ふ。次に變じて蠹虫と爲り、書物を貸りて食ふ、又變じて大虫と爲り。人を賣て食ふ、と云々。蓬窓日錄の張總が子を戒る詩に、銀の燈も剔盡して自咨嗟富貴榮花幾家か有る、紅日にも消難きは頭上の雪、黃金は都て是眼前の花也、時來て、言語する、風草を行き、運去て田園水砂を搏つ、寄與ふ兒曹須く勉力べし、各人箇尋で生涯活、と云々。凡ろ人の親の子を思ふ道に迷はざるはなし。燒野の雉、夜の鶴、のたとへもありて、禽獸すら身にかへて子を思ふ事いと〳〵切なり。さるを讒者間人ありて、父子の間をいひ隔つとも、能道理を思惟せば、不和に成べきやうなし。子の生計をあらましれきて、深切限りなき親なれど、其の心のかぎり力のかぎりいりもみしたる家を受るが子の上策也。かく深切にして臣僕に比すれど、一人當千の親の心をとりて、我爲に骨折らする事を知らず、其心にそむきてはらだゝせ、或は逐れ或は義絕せられなどするは、他人にも劣れる愚昧にて、信解品の窮子が富文に恐れおのゝき、近よる事を嫌へる類にて、譬喩品の父の長者が火宅中より、諸子を方便もて救出し、壽量品の父の良醫が事の緣ありて、遠く餘國に至れる跡にて、諸子他の毒藥にあたり、悶亂し、宛轉せるをり還り來て、方便を以て大良藥を與へ、救生たるごとき、慈親の厚志を知らざるなり。いかでかゝる愚子にも方便をもて、敎化せまほしきわざ也。

鹿兒嶋大嶋女子風俗

三輪田　眞佐子

在大嶋笹森つる子の君より、鹿兒嶋大嶋女子の風

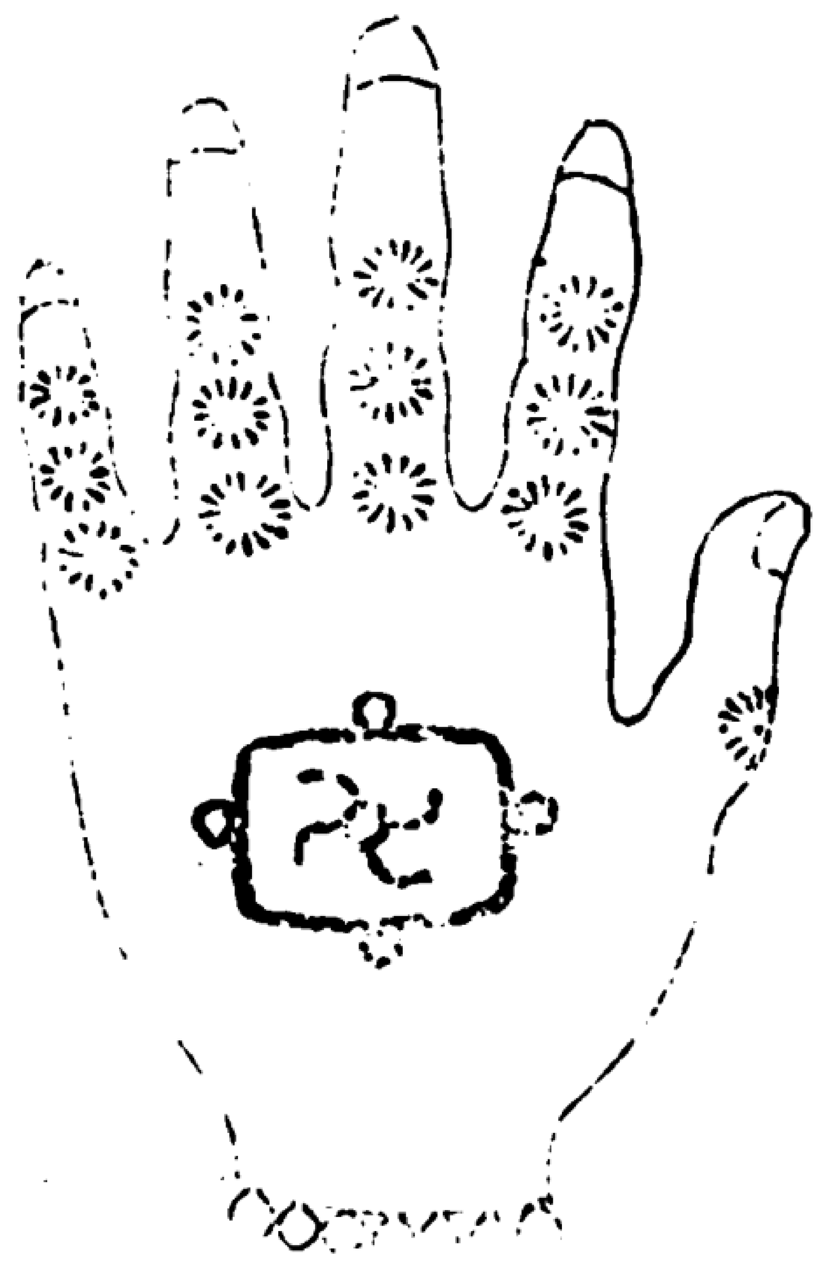
俗を、書にとりて送りたまへり。かゝるものをも本邦女子善良なる、風俗に、同化せしむるは婦女の任にこそ。

上等婦人



婦人坐するに足を左に出すは禮義なりと云ふ

手形



外に手の黥色々在り直し米三升にてほると云ふ而し貧民は米少なき故少しほると云ふ

中等以下女



畠戻りの女ビブを吹く圖なりビブは内地の笛の如き者なり

テルの内なるは唐いもなり

トチンクワ

頭は風呂敷かぶりしなり



禁裏御所女中語

赤門の雀

難波の蘆は伊勢の濱荻、江南の蘆は江北の橘、所所のならひかや。昔禁裏御所の女中どもが、よびたりといふ語を、見るに、さすがに柔和しく、優美に、みやびやかなる節あり。この語何時となく民間にひろがりて、今も通俗の語と成りて、常に用ひらるゝもの多し。此の禁裏御所女中語ともいふべきものを、世俗の語と比べて見るに面白ければ一ッ二ッ

民間の通稱	御所女中語
赤小豆	あか或はあか〳〵
蕎麥	あふひ
齒ぐろめ	おはぐろ
蛤	おはま
魚	おほろ
雜炊	おみろ
湯	おゆ
味噌漬	香瓜
れものゝさい	れめぐり
ゑび	かゞみもの
ぼた餅	れはぎ
一切の魚	れまな
蛸	たもじ
鯨	れさぐり
鰯	れむら或はおぼろ
かずの子	むらさき或はかず〳〵
糠味噌	ぢだんた味噌或はさゝぢん
赤飯	こはぐで
さうめん	ぞろ
なすび	なす

ちまき	まき
麥(むぎ)	むもじ
やきめし	むすび
菜(な)	おは
わわ	をみなへし
うたがるた	ついまつ
膳(ぜん)をあげる	お膳(ぜん)をすべる
鹽(しほ)	しろもの或(ある)はおいたみ
松(まつ)だけ	まつ
竹(たけ)のこ	たけ
こ糠(ぬか)	まちがね
堅魚(かつを)	おかつ
蒲鉾(かまぼこ)	おいた
ゐもの	お臺(だい)
鱠(なます)	おなま
べに	おいろ

ちさ	お葉(は)びろ
水(みづ)	おひや或(ある)はおひやし
錢(ぜに)	おあし
晝飯(ひるめし)	おこゝ
寢(ね)る	おしづまる
起(おき)る	おひんなる或(ある)は おひなる或(ある)はおひる
鱒(ます)	赤(あか)おまな
海老(えび)	ゑもじ
鯛(たい)	おひら
鮓(すし)	すもじ
ごまめ	小(こ)とのむら
餅(もち)	かちん
淺漬(あさづけ)	あさ〳〵
帶(たび)	おもじ
夜着布團(よぎふとん)	よるのもの
泣(な)く	むづかる

ありく　れひろひ
味噌　むし
酒　九こん
團子　いしく
豆腐　れかべ
大根　からもの

道灌山の虫

蓼川

ふる里に、誰まつ身にはあらねども、風なきにしをる丶かきねの薄、はらはぬにこぼる丶萩の上葉の露、もの思ふとはなけれども、何となう、ながめらる丶秋の夕ぐれ、いづくも同じとはきけども、野邊は、されども、またろゞろに、心ゆくかたもやと思ひ立ちて、道灌山は好めるわたりとて、あこがれゆきぬ。

道灌山といふは、昔の人の忍が岡の奥、日暮里の諏訪臺につゞける岡にて、彼の太田道灌が住みけるゆかりより、山の名をぞれひたりける。今も花見寺の隣りなる古寺が中に、馬琴翁の筆塚と並びて、繋舟庵の碑とて、建てたる石あるは、やがて道灌が庵の跡なりとかや。道灌が江戸城を築かむと、圖を案じたるも、此の所にすめるほどなりとか。其のころは、淺草わたりは、なほ一面の海にて、近く此處わたりまで、潮の入江なりけれど、道灌が、我が庵を

わが庵は松原つゞき海ちかく
富士の高根を軒端にぞ見る

とうたへるとなんいへるが、如何ならむ。たしかならず。

岡のべには、櫻あり、梅あり、桃あり、杉あり、常磐木あり、今は、東の裾は、一面の田畑にて、ろが末は、近く隅田川の流れを、木の間がくれに見、遠く筑波山の峯を、雲間に見れど、けしきは

いつはあれど、秋こそ殊更ゝはれは深く、虫にはこゝぞ都の名所なる。山ぎはなる野菊、野萩、尾花、千草八千草、思ひ〳〵のやさしき色にいでゝ、まねきかくれど、麓の小田の稲穂も、一かたによらむとや、穂にあらはれて、さは〳〵と、こらへずや靡くけしき、案山子もいかに見るらむ、持ちたる弓の手つきも、をかしげになりておぼゆれど、そゞろにうちゑまれて、うちわたせど、錦なすもみぢが木がくれを、白帆か水鳥か、見えつかくれつゆく彼方には、遥かに、あを〳〵とすみわたりたる天つ海原に、うす墨色してうかべる筑波根のけしき、おのれもし畫かく男子ならむには、筆捨塚は、此處にこそたてめなど、ひとり思ひ興ずれど、秋のさびしさも忘られて、其處此處と、うかれゆくまゝに、日は何時しかくれて、もの靜かなる山邊に、虫のねすゞしく、月いとあかく。月には、虫には、はしなく思ひ出づる事ぞ多かる。

岡のきしなる頂きに、藪を其がまゝのましどがき、風雅に結びたるさゝやかなる庵あり。住人は、碧山人とよび、世をすねての隠家なりけるが、三年ばかり昔に、世を去りてかへらず。其の後は、伴なりける刀自と、忘形見なる女の童とが、互に助けつゝ、庵を守るなり。おのれもとよりの知己にあらず。六年ばかりむかし、其の頃親しき友なりける人と、虫のねきかんとて、此のわたりにいでたる折りから、門に

　しぶ茶めせ野邊に山邊に幾里の
　　あはれを見るが此處の御馳走

と建てられたる碑の言葉に媒せられて、初めてあひ見しより、そがものしづかなるけしき、しかも住める翁夫婦が、よろづかざりなき心ざまのいとほしさに、花みむとては春、月見むとては秋、木かげをしたひては夏、雪にあこがれては冬、う

さはらさんとては學びの窓の隙、心の紛れざらん爲めとてはむづかしき書よむ折りふしに、常に友なりけると、共に絶えず訪づれけるが、此の一年ばかりは、昔には似ぬ月日をすぐしけり。思ひいでゝ、おとなへど、女の童はまづ迎へ、刀自もやがて出で來て、さても忘れでなどよろこびきこえてつねに、伴れ立ち玉へる彼の友なる方はと、とはるゝも苦るしや、忘れはてんと思ふに。彼は見すてたり。最早友にはあらじといへど、あなさばかりかたくれはしたる友垣を、いかなるいさかひしてか、破りたまへる。刀自がふたゝび、もとに結びかゝへしてんといふ。いな、うちおきたまへ。彼は人に義ありけり。余に信ありけり。されど、彼は人を欺きたり。余を欺きたり。彼が信も義も、皆僞りなりけり。彼は利已の爲めに、暫時信を假裝し、義を虚飾して、人の愛を買ひ居たるなり。彼は去年學を卒りて、世に獨立獨歩の身となれり。彼は世に用ひらるゝやうなれり。彼は遂にあるまじき不義をあらはせり。彼は遂にかひなき不信を示せり。彼は口惜しくも、あるまじき色に溺れたり。彼はあさましくも、ありがたき恩を忘れたり。彼はきたなくも、彼が平生の言を食みたり。彼は情なくも、朋友の誠をこめたる言葉をもまた塵とすてたり。彼は僞信、僞義、僞忠、僞孝、僞友、僞愛の人なりけり。おのれは、彼が容貌を友とせしにあらず。彼が五体を友とせしにあらず。唯彼が心をこそ友としたるなれ。さるに、彼が心、皆僞りなりけり。されどぞ刀自よ、おのれは齒がみをして、彼と交りを絶ちたり。さりながら、刀自の君よ、彼を見る十年一日の如かりし友情、たちてもたちかぬる愛着に、おのれはふたたび思ひかへして、彼が過去をせめて、彼が未來を救はんとせり。されど、彼は、反ておのれを恚り、おのれを罵りぬ。おのれも遂に涙をのみて、

彼を思ひ捨てたりといへど、げに道理に侍る、一樹の蔭だにたつはくるし、ましてや十年の友、たつはさこそ苦しさの限りなれ。されど、人は心にこそ侍るなれど、心くされてはせんなし。さるにても、彼の人が、さばかりの人なりけんとは、くちをしかりきなどいふ刀自の顔を、つくづくとうちまもりたる女の童は、妾は初めより彼の人は嫌ひなりし。妾を見てにこにこと笑ふ顔の、何となう恐ろしかりし。れん身はよき人なれど、彼の人の如き友と交るはをかしやと、密に母さまにつげたる事もありしと、何となき女の童の一言に、あはれや五尺の男子が、もろくも打たれたり。友はよく擇ぶべきものにこそ。

月はいよいよてりまさり、野邊も山べも、ましろににほふ露の草むら、誰がいかばかりなる駒や踏むらむ、



仰々しき轡虫、かまびすけれど、これもいさむときけど、にくゝもあらず。われきにけりとにはあらざめれど、をりふしふりいでゝ鳴く鈴虫は、うれしきものゝ限りなるに、まつとはよべど、うらむいろなきまつ虫のねのあはれにやさしき。虫はかなしきものとのみきくべきやはなどもの語りて、興ずる折りから、里の童とおぼしきが、どや〳〵とうち入りて、虫とりさやぎ、はては前栽をさへ踏み荒だかんとするに、せいしやれど、いつのまにか、洋服きたる官人の、あやしき女の手をさへ取りたるが、入り來りて、所有主もなき虫を捕ふるを、制する者やある。とく取れや、童ども。錢は高く取らせん。余が指圖して、取らずなり。制するやつは誰ぞなど、無法なる高聲。にくさもにくけれど、誰ぞ、醉狂者めが、狼籍すなどのゝしりつゝ、踊り出づれど、さすがに、にぐるが如く出でゆく姿は、見まがう方もなき彼の友。さてもあさましきものゝ限りや。

興もさめはてゝ、ながむれど、母刀自は銚子など取り出でゝ、けだ者の不禮など咎めな給ひそ。和君は今年めでたく業を卒へたまひにたる由、志どかりのよろこびを納めてよと、酒などすゝむれど、女の童も共にすゝめつゝ、これよりは故郷にや歸り給ふ、遠き鄙の任にやゆき給ふ、いづれ殘る事の悲しやなどなげく。いな、なは五歳六歳は、おのが志したる道の奥家を究めん心のやみかたけれど、かくて都にて住まむと思ふなれ、和君はまた里わたりに出でたまはずやととふ。いな、いかでか。妾も此處は去らじ。なまじなる世にまじらんくちをしさは、父上がくれ〳〵もいましめ給へれど、かくてぞ靜かに母上に孝養せよとは、父上が返へす〳〵遺したまへれど、妾は何處へか出づべき、移るべき。彼の門なる碑の建ちてんかぎり、妾はかはらでかくてあるべきに、たまさかのれと

づれは、たゞでもたまへ、母上を慰めまゐらする便りにと、きくもやさしき志。ればゞず涙にむせべど、ちかき草むらの虫の音さへ、とみに玄めりてればゆ。

さても、これは小學の業だに、たど〳〵しき女の童なるを、彼の友なりけるは、如何にぞや。上もなき高尚なる學校に入り、上もなき一かどの學びを究めたる人なるに、行ひは下等なる四足の獸にも劣りたるあさましさ。思へど、人は何事も心が本なり。學問は末のみ。嬢たち心したまへ。

お伽ばなし

夢の舍うぐひす

狐と烏

おのが身のみにくきも玄らず、心いと慢じたる烏ありけり。野原をあさりて、一片の肉を拾ひ得つ、啣みきて、とある山の梢にやすみ、四方をみまはして、なにの風情もなきに、心安めて樂しげに、啄ゝきはじめんとしける折こそあれ。この木の元の穴に、年久しく棲める狐あり、烏のもてる肉のうまうましくあかめるを見て、咽喉をならして羨やみつゝ、いかにもして、われ得てんと、智慧の袋を絞りけるが、やがて、思ひけん、やさしき聲にて、あまたる舌の根をうごかし。「烏どのや、けふは、そもいかなる吉き日ぞ、はからずも、君が美はしき姿を、見るを得ぬ。孔雀は愚か、君を見れど、ほかには、またと美はしき姿の、及ぶものはあらじ。されど、君が聲音、いかに朗らならん、惜しい哉、いまだ聞き得ず」と、さしも憾めしげに、かこちけれど。烏は聞きて心うれしく、高慢氣の起りきて、いでや、なほも美しき音を聞かせて、狐をおどろかしくれんと、肉のことをも忘れはて、一聲「どかあ」とさけぶ間もあらせず、肉は

地に落ちたりけり。狐しすましたりと拾ひとりて

　鼻高く口の見えぬか馬鹿からす
　　馬鹿と名乗りて、肉をとられつ

と嘲りつゝ、穴の裡に逃げ入りぬ。譽むるものには、油斷ならじとは、かゝることをこそ、いふらめ。

猫と猿

夏の眞晝のむし暑きに、家の人々は、風通ふすゞしき所にひるいやしたりけん、家の内いと靜かなる一間に、あぢといへる小魚をもりし皿あり。一匹の猫あらはれいでゝ、あぢの頭を嚙む。また一匹の猫、出で來りてその尾をかみぬ。この物音に家の人々覺醒めしかど、猫ども驚きあはてゝ、かみ合ひさま、おのが巢に逃げ歸れり。さて、甲なる猫「こは、わがみが得たる、魚なれど、そもじの食ふべきいはれなし」といへど、乙なる猫またこを嗔らし、「いなとよ、こはわが身が得たるなり」と、互に爭ひて、はてしなければ、甲なる猫のいへるは「ふたりにて、あげつらふとも、はてしなけん。さかし、隣家なる猿どのに、いづれが理ならんか、いざさだきをこはん」とて、共にうちつれて、猿の家をおとづれぬ。

猿は、けふつれ／＼なるに、はらひもじくて、得物もがなと小首傾くる折、誰かと見れど、ふたりの猫、大なる鰺をもちぬ。猿はいぶかしみて、何しに來りしかと問へるに、猫どもさきの始末を述べ、よきに判じ給へと請ふ。猿は打ちうなづき、「こは眞中より二つに分つてそ、よかんめれ。されど、まさしく分たざれど、いさかひのもとなるべし。われに、はかりどいふなる器あり。こをもては、物の重さ輕さを知り得べし。まさしく同じ重さにわかちて、とらせん」といひて、厨の方におもむき。はかりと庖刀とをとりいで、鰺を二つに切りて、はかりに盛り、その重さを見るに、右

の方重かり、「こは、切り損じつ。右の方重し。左の方を取るものゝ、不平はさこそ、とて、右の方を一切削りて、食ひぬ。猫どもは、わき目を振らず見てありしが、猿のふるまひに不審の眉を顰めしかど、智慧あさきものゝ悲しさは、猿のたくみを悟る克はず。なほも打瞻るに、猿は、又もはかりに懸くるに、こたびは、右の方輕すぎて、左の方重くなりぬ。「こは、またも同じからず、右の方を待つるものゝ、面白からぬは、明かなり」といひつゝ、左の方を削りて、頬ばりたり。猫どもは、たくみは知らねど、はては、その殘り少きを見て、「にやん」とすると叫べど、「さる」が宜しと猿は、我は顔に言ひつゝ、いつか、鯵の姿は失せにけり。

猫にやんときどりし甲斐もあらけなく
猿ははかりでおぢをせしめぬ

とは、向ふ側の犬が、話を聞きて、諷せしなりとぞ。これをぞ、鷸蚌の爭ひは、漁夫の利となりぬといふなる唐國の比諭に、に譬へつべきか。

このつぎに、掲ぐるは、

珍らかなる道行ぶり。
利口なる鼠。
目覺まし時計。

わらひ草（一）

柴刈翁

家庭の間、父は威ありて、猛からざるべく、母は慈悲深くして、甘過ぎざるべけれども、徒に規則正しく、四角張りて、嚴格に過ぎて、反て冷索なるべからず。無暗に小供を叱り威して、其心氣をして萎微振はざらしむるは、策の得たるものにあらず。家庭の間は、外飾なきを要す、眞の愛情の溢るゝを要す、殊に和氣靄々、笑聲洋々たるを要す。かゝる間に生れ立ちたる小供は、其心必ず正大にして、ひがみ根性なく、其

氣溶々として、こせづかず、善良の國民となりて以て大事を爲すに足りぬべし。おのれ、感ずる所ありて、古の書より、面白く可笑しき話を蒐錄して、題して笑ひ草と云ひ、逐次本誌に出すべし。中には敎戒の意を寓するものあれど、面白くして野卑ならず、可笑くして猥褻ならず。小供に話して聞すべきものあり。又女子自から戒とすべきものあり。要するに藹々たる和氣、洋々たる笑聲を、家庭に溢れしめて、以て家庭を樂しくし、以て敎化の萬一を補はむとするものなり。江湖の女子、幸に微意の存する所を諒察せよ。

一、鬼に瘤取らるゝ事

これも、今は昔、右の顏に大なる瘤ある翁ありけり、大行山へゆきぬ。雨風はしたなくて歸るに及ばず、山の中に、心にもあらず止りぬ。又木樵も無かりけり。恐しさすべ方なし。木のうつはの有りけるに這ひ入りて、目もあはずかゞまりて、居たるほどに、遙かより人の聲おほくして、どゞめきくるおとす。いかにも山の中に、唯ひとり居たるに、人のけはひのしければ、少し息出づる心地して、見出しければ、大かたやう〳〵さま〴〵なるものども、赤色には靑き物を着、黑き色には赤き物を着たる、さきにかき、大かた目一あるものあり、口なき物など、大かたいかにもいふべきにあらぬものども、百人ばかり、ひしめき集りて、火を貂の目の如くに點して、我居たるうつは木のまへに居まはりぬ。大かたいとゞ物おぼえず、むねとあると見ゆる鬼、横坐に居たり。うらうへに二ならびに居なみたる鬼、數を知らず。その姿各云ひつくし難し。酒まゐらせ遊ぶありさま、此の世の人のする定なり。度々かはらけはじまりて、むねとの鬼、ことの外に醉ひたるさまなり。末より若き鬼一人立て、折敷をかざして何といふにかく

ときくざゝることをいひて、よこ坐の鬼のまへにねり出でゝくどくめり。横坐の鬼、盃を左の手に持ちて笑みこだれたるさま、たゞ此の世の人のごとし。舞ひて入りぬ。次第に下より舞ふ。あしく善く舞ふもあり、あさましとみるほどに、この横坐に居たる鬼の云ふやう、今宵の御遊びこそ、いつにもすぐれたれ、但し、さもめづらしからんかなでを見ばやなどいふに、此翁、物の付きたりけるにや、また神佛の思はせ給ひけるにや、あはれ走り出でゝ、舞はゞやとおもふを、一どは思ひかへしつ、それになにとなく鬼どもが打上げたる拍子のよげに聞えければ、さもあれ、たゞ走り出でゝ舞ひてむ、死なばさてありなむと思ひとりて、木のうつほより烏帽子は鼻にたれかけたる翁の腰に、よきといふ木伐るものさして、横坐の鬼の居たるまへにおどり出たり。此鬼ども踊りあがりて、こはなにぞと騒ぎあへり。翁延びあがりかゞまりて舞ふべき限りすぢりもぢりゑひごゑを出して一庭を走りまはり舞ふ。横坐の鬼より始じめて、集り居たる鬼ども、あざみ興ず。横坐の鬼の云く、多くの年頃遊びをしつれども、いまだかゝる物にこそあはざりつれ、今より此の翁、かやうの遊びに、かならず參れといふ。翁申すやう、沙汰に及び候はず、參り候ふべし、この度俄にて、おさめの手も忘れ候にたり、かやうに御覽に叶ひ候はゞ、しづかにつかふまつり候はむといふ。横坐の鬼、いみじう申したり、必ず參るべきなりといふ。奥の坐の三番に居たる鬼、この翁はかくは申候へども、參らぬことも候はむずらむ、思ししし質をぞ取らるべく候らはむといふ。横坐の鬼、然るべし〳〵といひて、何をか取るべきと、おの〳〵いひさたするに、横坐の鬼のいふやう、彼の翁が面にある瘤をや取るべき、瘤は福のものなれば、それをや惜しみ思ふらむと云ふに、翁がいふ

やう、唯目鼻をぞ召すとも、この瘤は許したまひ候はむ、年頃持ちて候ふものを、故なく召され、筋なき事に候ひなむと云へど、横坐の鬼、かう惜しみ申物なり、たゞそれを取るべしと云へど、鬼寄りて、さは取るぞとて、ねぢて引くに、大かた痛き事なし。さてかならずこの度の御遊びに參るべしとて、曉に鳥など鳴きぬれど、鬼ども歸りぬ。翁顏を探ぐるに、年來ありし瘤、跡方なく、かひのごひたるやうに、つや／＼なかりければ、木樵らむことも忘れて、家に歸りぬ。妻のうど、こはいかなりつることぞと問へど、しか／＼と語る。淺ましき事かなといふ。隣にある翁、左の顏に大なる瘤ありけるが、この翁瘤の失せたるをみて、こは如何にして瘤失せ玉ひたるぞ、いづこなる醫師の取り申したるぞ、我に傳へ玉へ、この瘤取らむといひければ、これは醫師の取りたるものにもあらず、しか／＼の事ありて、鬼の取りたるなりといひければ、我その定めにして取らむとて、事の次第を細かに問ひければ、敎へつ。此翁いふまゝにして、その木のうつほに入りてまちければ、誠に聞くやうにして、鬼ども出で來たり、居まはりて、酒のみ遊びて、いつらおきなは參りたるかと云ひければ、此の翁恐しと思ひながら、ゆるぎ出でたれど、鬼どもこゝに翁參りて候と申せど、横坐の鬼此處參れ、とく舞へといへど、さきの翁よりは、天骨もなく、おろ／＼かなでたりければ、横坐の鬼、此度はわろく舞ひたり、かへす／＼惡し。そのとりたりし質の瘤返したべと云ひければ、すみつ方より鬼出で來て、質の瘤返したぶぞとて、いまかた／＼の顏に投げつけたりければ、うらうへに瘤つきたる翁にこそなりたりけれ。ものうらやみはすまじき事なりとか。

此の話は「宇治拾遺物語」といふ本の一の巻にあり。人々己れの分を守りて、妄りに他を羨む

まじきことを、面白く可笑しき例をもて、諭したるものなり。

二、夢あらそひの事

都にある某とかや、本女房はなくして、腰元に召使ひ申す女二人あり。一人は出雲の國のもの、一人は豊後の國の者なり。或時、二人の女、晝寢して居ける間、疊半でうはどあり。しかる所に、奥の座敷に、二人の女の聲にて、呻く音しける、不思議におもひ男、忍びかけ寄り見れど、二人の女の丈なる髪が、そらざまに追ひのぼり、上にてはひとつに亂だれては落ち、又は兩方へ分れなどし、中々すさまじき事、申すも愚なり。さて二人の女の枕元を見れど、ちひさき蛇、一尺二三寸ばかりなるが、二すぢ互に舌を出し、ひろめかし喰ひあひてはのき〳〵する。此とき、一人の女、事の外に齒切りをして呻く、是を見て、男は膽魂消し、呆れ果てゝ居たり。さて、其後男は、いつもの體にて聲をして、かの女ども寢ねたる座敷へ行けど、二筋の、蛇そのまゝ別れ、女の胸にあるかと思へど、そのまゝ失せぬ。長き髪は、いつものごとく、美くしく解き立て結びたるまゝなり。そこにて、男、二人ともに起せど、目を覺しけり。みれど、二人共に汗を流し居たり。男云ふやう、なにぞ夢ども見たるかと問へど、いや〳〵夢も見ぬと申す。一人の女申しけるは、不思議や、人といさかひたりと思ひたるばかりと申す。さて、男はおそろしくおもひ、それより二人ともに暇を遣り、かさねて一人身にて日を暮し侍る。女の妄念はおそろしき故、男にすぐれ罪も深きと、古へより申し傳へ侍る。

この話は「曾呂利物語」といふ本の五の巻にあり。女子の心小くして、嫉妬深き事を戒しめむとて怪しき話に托して、さとしけるものなり。

流行の栞

今の髮の形(二)

中尾鶯夢

われ、島田髷のかず〱ある中にて、姫御前に結ひ給はんを、勸めまゐらするは、醜の夷の國振なる、束髮のことはいはで、文金島田の形を措いては、他はあらじかしとぞ、思ふなる。さるにてもまた、高島田の品あまり下らで、意氣なるも、なか〱に捐棄て難き、風情あんなり。こは、重に料理店等の女中にて、意氣地をあらそふ儕輩、あるは藝者などのすね者の、結ぶ髮なるからに、心ある人々は賤しみ蔑みすめれど、品はさほどに下るにもあらず、こをいはひの宴にはんべる娘、又は葬ひの列に連なる女房の、結ぶなる、わづかに白元結にて、けじめつくるはあれ、われ未だそのいはれを知らざれども、いはひの莚に用ゐる程なれど、結ひ給ふもむげに劣りはせじ。たゞ心すべきは前髮のたかまり、タボの長さを、忌み嫌ふべきのみ、そは見にくゝて浮き心のさま、あからさまに知れぬれどなりけり、又根かけの色合ひも、その品にかゝはるべし、金糸はいはずもあれ、銀糸は、心のほど見へ透き、白は、淡白にして高潔なり、紫は、ゆかりの色艶めかしくも亦高尚く、桃色は、萍の浮氣の質をあらはし、紙根がけはいやし。並島田の如きは、たとなしさは含めども、あまり好ましからず。

丸髷。なべて、世の、令夫人には、ぢみにて、こうとなる、はでを忌み、艶めかしく俗にいはゞ、あだつぽきを避け給ふころ、いみじかるべけれ。されど、丸髷のにべも靡く、品を保ちて見仰ぐるに足るをなん、もはら結ひ習はせるなる。丸髷にも、そのしんに用ゐる形のさま〲ありて、見る目に異なりて、見ゆるも可笑し。近頃は、歌舞妓大一番形の流行れり。それに次ぎては、小町形なるべ

きか。又偶々年古りし姥櫻の、返り咲きを希ふにや、不幸にも善き嫁を、むすび得ずして、わたら盛りをむだに過さん年頃の方々、島田を結はゞ若やぎたりといはれなん、等を氣遣ひて、丸髷結ふ人もあり。これらは、概ね小形を撰ぶが如し。

もゝわれ。婀娜氣無き少女の、髪結はん振は、もゝわれにこそ、眞摯なるに憎からぬさまありて、やんごと無き席にはんべるも、露恥かしからず、立交らふべきなり。その形の。大いなるは、似つかはしからざれど、髪結ふ婦人に小さく結はせん事を、注意し給ふべし。もゝわれの品は、多く伊多胡の色合ひに、かゝはれり。紅鹿の子もよけれど、桃色のおとなしき、水色絞のすがくしき、いづれをか撰み、いづれをか捐つべきぞ、少女子の意のまにく、他の色合は、なべて惡かりなん。

とんぼ。こは、令夫人等の、湯あがりの髪結び、あるは、洗ひ髪の折、髪結ふ婦人の來ん間の、ふさげるまで、結ふなる形にて、飽かず見らるべし。

銀杏がへし。こゝ二三年前までの、娘の髪振はと問はゞ、必ず銀杏がへしなるべし。いまにても、人に召使はるる身柄の娘縁遠きもの等、結ひ居るあり。されど、多くは鄙里に、殘されたる、風俗なり。たゞしは珊瑚珠の根がけ、むやくになさんを惜みて、結ふ業多し。かく言へども、あながち擯斥くるに非ず、その流行に後れしを、いへるのみ。

しやぐわ。　みつわ。天神髷。　たたむこばん。これ等は、皆いやしけれど、令嬢令夫人たち、ゆめ結ひ給ふべからず。若し　結ひたまはんには、人人の嘲誹侮蔑はもとより、その品を毀ね格を墮さんこと、靦面なるべし。

束髪。いまや、大河の堤一時に潰裂れしが如

く、女流社會の嗜好に投じ、時尚をさだめつるは、束髪なるべし。こはもと醜の夷國の振なること、誰しも知る所なるが、その手輕に便利なるより、學びの道に暇なき姫御前、家の政に隙なき令夫人等に、もはら行はるゝも、理なるべし。されど思ふ仔細もあれど、今しぜし言はじ。たゞ世の赴かんさまをうかゞひ、機會を俟たんのみ。

帶の結びざま

髪につゞきて、頭飾の品々より、羽織着物等の、袷柄、木地縞、裏地摸樣等、書きしるさん心組にて、ひと日朝まだきに家を出で、車を飛ばしつゝ、市中の名だゝる老舗、あるは日頃親しきさるみちの社會の人々のもと等、驅け廻り訪問れて、探り調べたれど、いまは、恰も夏には遅く、秋には早く、時と流行の原理に所謂、あひの時なれど、その流行のさま、いまだ定まりて、闇路を辿る如く、或は、今もはら意匠をこらす商賈人もありて、少しく時期に適はず、フラネル季節ともいふべけれど、この號は見合はせうめぐさに帶の結びざまにつき、少しく陳述る所ありて、次號は必ず詳しく掲ぐべし。

帶の結び方は、春夢子のある双紙にかゝげられしが、われと略同じ意見なり。總じて結び方に、お太鼓、吉彌むすび、やの字、ひつかけ、蚊の口、だらし、等の名あり、おの〳〵さま異なれど、上品にて流行なるは、お太鼓にて、他は、皆行なはるれど、禮義をかきし平生さまなり、やの字のみは、少女の儀式結びとなり居れり。

男の子の博多帶は、結び方一樣にてかはらねど、便利なる世の、帶止めの流行りて、用ゐる者少なからず、されど略義にて、禮義正しき席には、堅く禁制。

改良マッチ二種

あまり輿薄きまゝ、近き頃誰が、工夫しけん專賣

特許の出願中なりとて、賣出せる二種の改良マッチのことを知らせん。いづれもその入物の、つくり方ピンヘッド（巻煙草）のあき殻の、二重なるを一重に、うすき木片にて作り。一方に自由に開閉し得る口ありて、中なるマッチ片を出入するなり。さて、甲なるは、マッチの片線香にて柄をつくれるにて、箱の左右に擦り紙を貼り、之に觸れて點火す。その時ブリッキにてつくれる、小さき線香立あり、これに火焔を消して、立て置けば、凡そ卅分ばかりも、火を保ち居り、煙草等の吹火に都合よろし。乙はマッチの片松の木にて、通常のマッチ片の四分の一位なる細さに、たけ短かく作りたるなり。その入物の内側上口の方二三分の巾に、擦り紙ありて、倒に入れある片を出す時、口の方を上下より強く壓し、片を引き出せば、火焔強く明に點火して、五分間を保つべく。通常のマッチの、時にしめりて點火せず、又は火焔くらく直に消ゆる缺點を補ひしに、外ならざるべし。

九十九髪

（一）

大町桂月

飲みすごされし酒の故のみにもあらざるべけれど、年頃たれて病氣のなかりし兄の、心地にはかに惡く、花咲ひ鳥啼く春の彌生の空に、むなしく垂れこめて、打伏せし枕上らず、熱は四十度を越ゑて、囈言など云はるゝに、おはてふためきて、近きわたりに名だゝる醫師を招きて、診察を乞へば、肺炎といふ病なり、一週間も立てば、おこたるべし。歸りて藥を調合すれば、つかひの者おこされよとて、打傾きたる樣、更に見ゑず。
その歸るさに、事になれたる老女のお時、醫師を送るさまにて、門の外まで行きけるが、やがて歸

り來りて、妾を小影に招き、ひそかに醫師に問ひ侍りしに、容易ならぬ症の由、申されきといふに、はや胸ふたがりて、覺えずよゝと泣き沈みけるに、御心しづめて皆迄聞かせたまへ、容易ならぬ病にはあれど、熱だになくなれど、けろりとおこたらむとの事なれど、心強くおはせ、病には藥より看病が大事といふに、お孃樣の弱らせたまひては、何かせむ。長くとも三週間は過ぎざらむほどに、御心はげまして御看病あらせたまへ。御涙ぬぐはせて、いざ參らむといふに、やうやく涙ぬぐひて、兄のふせる側に至れど、熱にうなされて、物も覺えず、口のみ動かして、頻に囈言云はれぬ。まめやかなる老女の時の居て、杖とも、柱とも、賴みに思はるれど、かゝる時にとりわきて悲しきは身内の一人もなき身の上なり。父母の居まさば、如何に心强からましを、天にも、地にも、血をわけたるは、唯一人の兄、思ひがけもなき大病に、

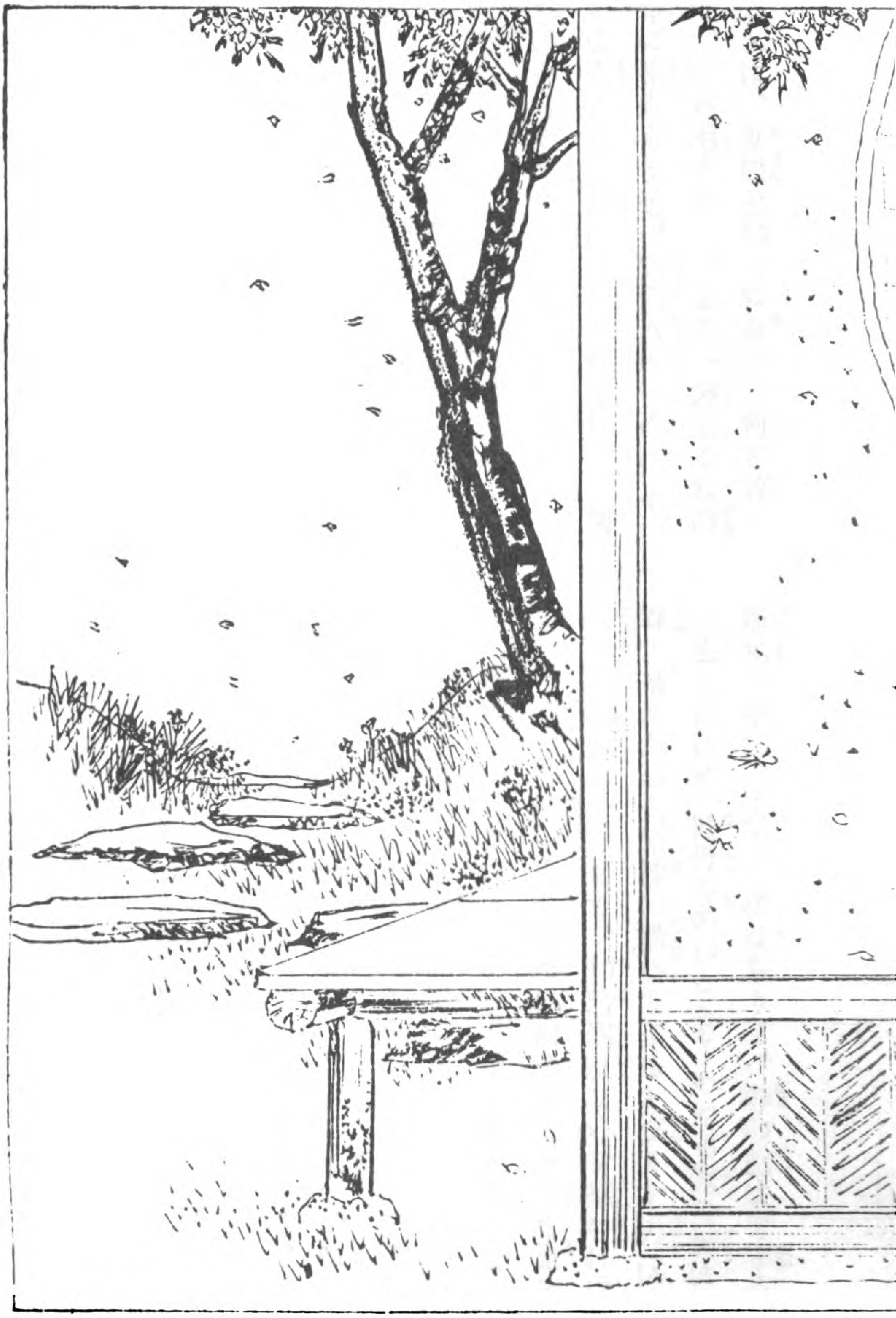
夢かとのみ思はれて、つらくも、かなしくも、死なむばかりの病にかゝらむとも、己れの身ならば、更にくるしからじ。苦しきは看病する身の上になむ。げに、己れが病にかゝるよりも苦しきは、人の看病なり。思ふまゝになるならば、己れの身の代らましを、熱に正氣を失はれて、言葉をかはす由もなき兄の顏をながめ入りて、せめて身内のあらばと、又も急に悲しくなり、顏をそむけて袖をかざし、聲はたてじとくひしばる折しも、音なふ聲の聞き覺えあるに、いそぎて涙ぬぐひて出で迎ふれば、前夜兄を送りて來られたる川田の君なりけり。

前夜は失禮つかまつりぬ。是迄一日も欠さぬ春野君の見えざるは、二日醉にはあらずやと、例の爽やかなる聲して問はるゝに、いなとよ、肺炎といふ病にかゝりて、ふせり侍り。昨夜は一方ならぬと言はせも果てず、きづかはしや、熱は如何に、食

事は如何に、おかまひなくも、いざ、御病人にあはしてたまはれといふ。熱は四十一二度の間にて、藥より外には、何も物せざれど、別に心配すべき程にはあらず。むさ苦しけれど、おかまひなくもとて、案内せり。兄の名を呼び、又手を握られけれども、絶えて正氣なかりければ、今は熱の昇りつめたる所なり。このまゝ靜にして置くが宜しからむ。よほど熱のいみじきやうなれど、その肺炎の常なり。もと肺炎の病は、肺病とは違ひて、不治の病にあらず、熱だになくなれど、直におこたるべけれど、つとめて氷にて冷させたまへ。御人數の少くて、さぞや御不自由ならむ。今は學校よりのかへるさなれど、ひとまづ歸りて、やがてまた參らむ、何の御役にも立つまじけれど、心ばかりの御看病にと云はるゝに、その御志はかたじけなけれど、いとかしこし。看病は妾どもにて足りなむ、御身をわずらはしまゐらせては、兄に對してすまず、中々に心苦しけれども、答へたれど、心の中には、世にかくばかり深切なる人もあれどあるものかと、覺えず涙の溢れぬ。御身、兄さまに對してすまざれど、われもまた他所に見過しては、兄さまに對してすまず、竹馬の友にはあらねど、日頃意氣相投じて、兄弟より親しくおつきあひ申せる朋友の中に、何の遠慮の入るべきなど云はるゝに、此上いなむは、反て無禮にやと思ひて、あくまでもうれしき御志、なにぶん宜きにとばかり答へければ。その夜來りて、夜もすがら、いも寢ず看病されぬ。

兄なる人は客好きにて、平生交れる人も多く、常に夜更くるまで語りあひて、いとにぎやかなりしが、病氣になられては、其わりに客の來らず、またく音づるゝ人ありても、病の事は問はるゝか、問はれぬかに、はや、妾に向ひて、花の噂、芝居の評判、さては役者は誰を贔負になさるゝやなど





話しかけらるゝに、世間を知らぬ身の、何と答へむ由もなくて、いと困ずるに、正直一方なるれ時の、とりし年に遠慮もうせ、御病人のそばにて、烟草を吹かすは固より、話などせぬがよしと、醫師の申されしにあらずやと、あてつけて言ふに、客よりは妾の顔まづ赤らむこと多かり。なべて、日頃親しかりし人のうとくなり、度々來られたる人の足遠くなれる中に、日頃絶えて音づれざりしに、病氣になりて、打てかはりてしげ〳〵音づれたまひしは、かの川田氏のみなりけり。始めの夜、徹夜して看病したまひ、それより後も度々來りて夜を明したまひ、猶晝の間、幾度となく來られ、熱のやう〳〵下るを見て、よろこばせたまへり。一旦、物も覺えざりし兄も、熱下るにつれて、正氣つき、昨日は四十度、今日は三十九度半とやうやう下りゆきて、遂に二週間ばかりにして、兄の病は全く癒えぬ。

病氣の中に、大方の櫻はちりて、春の色はや半ばは去りたれど、牡丹花のひらきそめたる庭の面に、春に殘れたる八重櫻の猶盛りなるを盛りを肴に、床上げの祝ひせむとて、知己朋友などを招かれけるに、病氣の時一度も音づれたまはざりし人も見えて、賓客、いと多かりしかど、度々徹夜までせられて、妾一家の力と頼みまゐらせし川田の君のみは、來まさず、如何なる御さはりのあるかと、心もとなく、部屋の窓あけて見出す庭の面に、吹くともなき春風に自から散る花片の後追うて、ひら〳〵と飛びゆく孤蝶の姿のあはれさや。

○可憐孃　中尾ぬしこのごろこゝちつねならずして、筆とりかねたり。こたびはえかゝげずなん。

文林

深夜萩　鎌田正夫

里人はいねしづまりてはぎのはの垣根にそよぐおとのみぞする

秋旅行　内藤存守

もみぢ見にこし旅ながらしば原の里のいでゆはあみてこそみめ

庭上月　小出粲

つきかげも野分の後ぞおもしろき庭はあらしてみるべかりけり

をりにふれたる　宮地嚴夫

草むしゝかはねの上にすむつきのかげものすごきもろこしの原

海邊秋風　阪正臣

つねきても淋しかりけるあら磯のあまの苫屋にあきかぜぞふく

雨後夏月　三浦千春

降り過し雨ばかりだにすゞしきをくもまをわけて月も出にけり

夜虫　仝

賤が家の秋も夜さむのきり〴〵す飯たくかまのもとになくなり

露　三輪義方

思へ人野邊のかるかやかりの世はたゞ朝つゆの干ぬまなりけり

月前鹿　宇野默道

小夜すがらあはれ妻こふさを鹿のこゑさへすめる秋のつきかげ

鶉　仝

夕ぎりの立やあはれのあきの野にきくもうづらの聲ぞわびしき

秋山行　菊池眞澄

落ちたるを拾はぬ御世もさゝ栗の

ゑめるやま路は行がてにして

述懐　齋藤　乾

蝦夷つゞれ身にまとふとも心には
大和にしきをいかで脱ぐべき

庭上月　小池　道子

玉すだれかゝげしまゝに更にけり
雲井のにはのあきのよのつき

朝露　前田　朗子

あさまだき起出てみれば我やどの
軒のしのぶのつゆぞこぼるゝ

海邊秋風　仝

あまかやのきぬたの音も聞えけり
ゆふべ淋しきうらのまつかぜ

野月　鍋島　榮子

なかぞらに月やなりけんあし引の
山のすゑ野もくまなかりけり

秋眺望　松平　健子

みるかうちに遠山ざとの夕げぶり
ひとつになりて霧こめにけり

雨中萩　仝

月かげのやどゝなさまく植たれど
あめにかひなき庭のはぎはら

秋月勝春花　下田　歌子

はる山の花のにほひもけたれけり
雲間もりくるつきのひかりに

山路秋行　三宅　龍子

さゝ栗の苞をもえたりいざゝらむ
ふもとのもみぢみつゝ歸らん

山路霧　鶴　久子

ぬば玉の夜ぎりやいまだ殘るらん
明てもくらしやまのしたみち

待月　仝

やまのはのあたり明るく成ながら
待るゝ月のおそくもあるかな

山路霧　中島　歌子

霧立てやま路は見えずなりにけり
おくれし友をまつとせしまに

初秋扇　諏訪　晴子

ときのまもうちもわかれぬ扇だに
わするばかりの秋のはつかせ

幽栖秋來　田邊和氣子

通ひ路もあるかなきかの草の戸を
ふきわけてくる秋のはつかせ

秋扇　内田遊歌子

いまさらになれてはさすが秋風の
ふけど棄うきあふぎなりけり

かたつぶり　安藤　菊子

家にありてこゝろやすしとあめ風も
しらずがほなるかたつぶり哉

虫　彦坂　尊子

さゝがにの糸引ろふるまどの戸に

はたおり虫のこゑしきるなり

初秋露　西澤ひで子

秋はまだ淺茅がはらのゆふかぜに
むすびもあへぬ露のしらたま

晩夏蟬　本郷　尾花

なきさはの森の木末になくせみの
なみだや露のはじめなるらん

夏雲　仝

春の日に花とまがひしゝらくもゝ
なつはあやしき峯をなしけり

萩　松原ゆき子

萩の葉におくしらつゆのゑだ毎に
さやかに宿るあきの夜のつき

榮花物語を讀みて　武島羽衣

六國史につぎて、御代〳〵のことどもしるせる文

おほかるが中に、この物がたりぞ、ひとりすぐれたる。こは、延喜の御代より始めて、白河のみかど迄のおほやけわたくしの ことどもをのせたれど、よく讀みあぢはへんには、そのかみの人の心ばへ、あるは衣のなり裝束のうつりかはれるさまなど、あざやかに知られぬべし。

この物語の作者につきては、くさ〴〵のあげつらひあれど、始めより「鶴の林」までを、赤染衛門の作れりとし、殘りの卷には、末の世の人の、ものしたるとするぞ、めやすかるべき。さるは「根合せ」の卷に「榮花の上の卷には」といへる詞もあり、また詞づかひ、書きぶりなどの、いさゝかことやうにおぼゆるふし〴〵もおほかればなり。されど、其作者の、また女なりけんことは「歌合せ」の卷に、其ほどの儀式ありさま女の老るすことならねどしるさず」といひ、また布引瀧の卷に「こまかには女などの心およぬことにて止めつ」とあるにてしるべきなり。文章のさまは、なべて、まめやかにうるはしく、艶にこまやかにて「浦々のわかれ」「粟田殿の姫君の、御宮仕へのわたりの、あはれにものがなしき、あるは、御堂の御ありさまの、まどゆく、目もあやに、きら〴〵しき、あるは「初花」「藤壺」の、めでたく心にくき、あるは「石蔭」の物すごくうらさびたるなど、さま〴〵にめでたき筆の力なりかし。

さて此物がたりは、たへる名にてもしるく、大かたは、入道殿の御ありさまをうつしたれど、此御一族よりほかのこと、又この御すぢにまさなかりしことなどは、もらしたるも多し。かの「烟の後」の卷に「後冷泉院の末の世には宇治殿に入りゐさせ給ひて世の沙汰もせさせ給はず、東宮となん中惡しうおはしましければ、その程の御事どもかきにく〻わづらはして、え作らざりけるなり。」とて、

後三條院の御事をもらし「根合せ」の卷にも、御族のうちなる內大臣師實卿のことゞもは載せて、御族ならざる敎通、賴通卿の御事は、詳しうも物せざりしがごとし。

そも入道殿（道長）の御勢ひは、大姬君の、內にまゐらせ給ひしを始めにはあるべき。それよりは、榮花の初花も咲き、葉もしげりあひて、果ては、さきぐさのみところまで、皆后と仰がれ給ひしは、先この世にもたぐひなく、行末もためしあらんや。されど、后といへど、此御ぞうのものとのみ思はるゝやうになりて、後三條のみかどの御時、侍從宰相の女の、上に思はれ奉りて、女御にて御子うませ給ひしを、世こぞりて、いみじうためしなきことゝ思ひけるにてもしりぬべし。かくて、大殿の御勢ひのさりゆけど、一條院の一の宮さへけなされ給ひて、いと〳〵はしき御ありさまの、あまりなるまでならせ給へど、大姬君が、父大殿を諫め給ひしほどぞかし。又師殿の御方、三條の御方の、御宮づかへのわりなきなど、ひとへに大殿のこの世ならぬ御有樣によらずてやはあるべき。

かくて、入道せさせ給ひし頃には、天の下、その蔭に宿らぬものもなく、かの御堂建立の折、國々の守共「地子官物はとゞこほるとも、御堂の夫役材木などは、われも〳〵ときそひ仕うまつり、近う見奉る人は嫉み、遠う見奉る人ははるかにをがみまゐらせて、今は此御堂のあたりの草木ともならんと思へる人のみ多かり」などしるしたり。

かゝれど、これより佛の敎へ、ます〳〵さかえて、彌陀の光のかげに、かくれ奉らんとするものいよよまさりゆき、皇太后宮の女房たち、結緣の料とて、法華經かき奉りしほどにても、そがかたはしのおしはかられぬべし。

されど、後三條のみかど、世をしろしめし給ひしよりは、大殿さへ失せ給ひけれど、この御族のあ

りさま、やう〳〵おとろへざまになりゆきぬ。この後三條のみかどは、末の世には、あまりなるまでめでたくおはしましけるみかどにて、おとろか下も、道ある世とはなし給はんの御志にや、内裏、つくりいでさせ給ひてすたれたる儀式有様を古へにかへし、よろづにことろかせ給ひて、無証の庄園を召上げ給ひ、あると、女房の衣の數など少なくし給ひしなど、御才のいみじきまゝに、皆自らおきてさせ給ひしかど、さむかりの宇治殿も、籠りてのみゐさせ給ひて、世も志らじ物なども奏せじとて、世をすてたるやうにておはしましき。まことこれぞ、春日山のかげくらく、佐保川のながれあせそむるもとにはありけん。

さはいへ、つら〳〵そのかみの世のありさまを思へば、一條院の頃より、あさましきまで内裏燒けて、帝もきさきも、里にのみとまらせ給へば、おほやけの儀式ども、やう〳〵にうつろひて、古にそむけるふしども、いとれはかるにいたりしなり。かの三條院の御時、一品宮の生れさせ給ひしとき、例は、女には、御劒なきを、そのたびは奉りしかど、遂に後のためしとなりて、後一條院の御時、中宮の、御女うませ給ひしにも、又御はかし奉りしなど、げにかく志どけなうなりゆけるありさまのかたはしとも見なさた見なされんかし。

九十九里の濱にあそべる記

高田昌延

學びやの休のほど暑さ凌ぐものをとて同じ學の友どち二人みたり打つれて、九十九里の濱にいたる。緑滴らんむかりの老木の常盤木茂れるが中に、庭いと廣やかにして、きよげにかまへたる家居をもて、假りのやどりとはなしぬ。み出せば渺漠たる海水は、萬里一碧天と連り、輕くかけれる鷗、

眞帆あげたる漁り舟などと、雲間にほのめきて、其數をしらず、まづ疾く起出て海にむきて浴むに、すが〳〵しきことたとへむ方もなし、日ものぼり、暑ささかりなる頃あるは書よみ厭たる折などに、幾度となく飛入りては、あみぬ、潮干には貝を拾ひ、潮みてど舟に棹さし、釣をたれ、網をうち、などしつゝ、夏のながき日もいと惜しき心地す、夕には波うつきしに立ては、月をながめ、やまとうたからうたなどもてあそびつゝ、夜更るまでうち興じ、まくらにつけど波のひゞきもしづまりて、千鳥の聲さへもきこえて、さすがに旅の枕もいとさびし、されど、

よるなみを友としふれど世の中の
　夏てふものはればえざりけり

そも此濱を、九十九里とぞ云ふ、さるは昔し頼朝公石橋山に敗れて、此國にのびさせたまひしとき、上總なる大東岬より下總の海上郡飯岡といふまで、六町毎に箭を插したてて、しるしとしてはかりしに、其箭の數九十九本ありけれど、やがて斯くは名けしとぞ、またの名を箭插が浦ともいふ。この浦の潮は、多く鹽氣を含めり、たえまなく大洋より吹來る清風は、松の梢をうちならして、こよなく涼し、名ある浴場とは異にして、人のあそびさわぐものもすくなければど、己れら學生などの暑を避けんには、こよなきところなり。けふゆくりなく、故郷の、父母さてははらからの、ことなど思ひ出でゝ、

つくもさと海山遠くへだつれど
　あはんすべなき片貝の浦

里人どもは、盛に漁りをす、わきて鰯は其名世に高くて、毎年數十萬の金にかふるとなむ。手ぶり慣はしなど、をかしきこと多かるが中に、なべて義といふこれを重みするこそ有難けれ、くはしくはあぐるに遑なし。武術を修むるもの〻多きは、

處からことにめづらし、或日二里ばかりへだゝりたる東金といふ處にものしぬ、けふはなにがしの大會なりとて、或は擊劍或は柔術など其外種々のことをす。

あまさかるひなのをのこも國のため
　かためて守れものゝふのみち

今一つかゝまはしきは、すべて女の男にまさりて見ゆることなり、すべて此わたり殊に舟子は、聲音正しからず、方言さへ多くて、容易に聞分けがたきを、女はいとさはやかに、應接にも巧にして、智識の上にても男に優るも決して劣れりとは思ねず、家のことゞも、多くは女子にて辨ふるなり、さるは男は幼きより櫂をとり、網をうつことのみわざとすれど、女は、常に家にありてをつとにかはり、よろづの事をさめ、又人にも交はれどなるべし、うつさばなどか移らざらむといひけんはげにさることぞかし、さていつしかゆく水のはやくも月日くれゆきて、庭のまがきにすだきてなく虫の音のあはれにきこえけれど、暦日なき身には、いとゞ驚かれぬ。

きのふまで夏といひしをこよひしも
　虫の音きけど秋はきぬらし

いそぎ行李をとゝのへて明る朝とく立出で、都にころ歸り來にしか

日記の一節　太田貞子

廿八日、つとめて滊車にて大津までとてのる、空くもりたれど、にはかにはと、たのみつるを九時頃より雨いみじうふり出ぬ。滊車のながめもくもにさへてわびしさいはむかたもなし。大垣をへて垂井につきぬ。養老の山前に見ゆ、名高き養老瀧も此の山の内にありといふをきゝて、

親をおもふ心にめでゝこゝろなき

岩間の清水だけとなりけむ

關ヶ原は古の戰のあとなれど、ゆる〳〵と見まはしけれど、例の車なれどせんかたなし、南宮山道の左に聳え、家康の床几場といへるは右の方にあり。石の垣もてつきめぐらしたり。なべて此のわたりにはうらみをのみてむなしき露ときえ、あるは、刄折れ矢つきてあらがねの土とうづもれしも多からむ兆がたましひ今は何處にかさよふらむ明らけき今の大御代の樣は見るやなどれもひいつるに雨はいやましふりしきりて、かたはらの夏草露おもげなり。

夏草にやどれる露やもの〻ふの
むかし殘し〻なみだなるらむ

古の不破の關も此のわたりならむ。今ははや月のみもるといひけむ軒端もあとなくなりにけり。彦根につきぬ城のあとは小高き岡の上に見えわたれり井伊氏のむかしもおもひ出でらる〻、こ〻を出れど、水海の面も遠く見わたされておもしろし、八幡よりしどしゆきて、湖水の上をわたる。右にはまはかたは波にいざよひ左りには勢田の長はしも見ゆ、夕ざれの景色は見えねどいとゆかし

急がずど勢田の夕日も見るべきに
あやなく過るくろがねのみち

石山も此の近きわたりなりといふに、まづおもひ出らる〻は、むらさきのゆかりめでたく染め出せし、須磨明石にころ、津につきぬるは十一時どかりなり。義仲寺をとひ三井にもうで〻やがて車をはせて唐崎の松見に行く、松は幹一本にして枝八方に生ひしげり、百坪にも廣がれり、末ごとに古き代のものともしられ、むかしもおもひ出でらる、風雅集に「からさきやかすかに見ゆるまさで地にまがふ色なき唐崎の松」とあり、實に水海の岸なれど、かくはよみたるならむ。幾千歳打ちよする浪にさらされつ〻、今の代にも逢ひたらむと

おのれも
なみのおとにしらべあはせて幾千歳
崎のまつかぜ吹きに吹きけむ
明らけき御代の光りもさしそひて
みどりいやます唐さきのまつ

歸りきて京都へおもむく、こよひの宿り所は新町通りなり、あすの見所など調べていねつ、

雜報

●青山御所へ行啓　皇后陛下には去し十二日午後二時御出門、青山御所へ行啓、皇太后陛下に御對顏在らせられ、種々御談話の末、黄昏頃還啓遊ばされたり。

●兩陛下御聖德　近衛忠熈公は、維新の前、風雲地を捲くの際に當り、皇室の藩屏として王事に勤勞せられたるは人の知る所、今は八十有餘の老體にて、起居も自由ならざるよしなるが、兩陛下は深く公の勤勞を御思召され、毎週一回づゝ御見舞として、兩陛下の御使、公の邸に臨み、慰問を賜はれりと承る、いと畏き事にこそ。

●皇太子殿下の轉地御保養　皇太子殿下の御不例は、追日御快癒に向はせらるゝ由、就ては轉地御保養の爲め、本月下旬靜岡縣下沼津の御用邸に成らせらるゝ御豫定にて、堤内匠頭及び内匠寮技師等の、目下同御用邸に出張せしは、同御殿の改築等に關してなりと承る。

●山階宮の御婚禮　山階宮菊麿王殿下、御結婚のことは、去る十四日官報號外を以て公布されしが、當日午前七時三十分儀仗兵として、騎兵一分隊及び御列馬車參集し、同八時宮御邸より、黒岩家令以下、家從列を整へ、九條家へ參り、同九

時御息所範子殿下、(九條範孝公の次女)九條家を御出門あり、行列御次第左の如し、

宮家從(騎馬)　九條家々從　騎兵　騎兵
　　　　　　　九條家々從(騎馬)　騎兵
御馬車(別當眞木子爵令孃愛子御陪乘)騎兵　騎兵(下士)馬車
(黑岩家令)馬車(九條家々令 同 家扶)騎兵(下士)騎兵
九條家々從
九條家々從(騎馬)

斯て九時三十分御入輿、別當以下家職御門内に奉迎す。

御媒酌杉皇太后宮太夫、同夫人は朝來宮御邸に在り、同十時御式を行はせられ、午後より聖上より勅使堀河侍從、皇后陛下より御使小池權掌侍、皇太子殿下より御使日野東宮侍從を遣はさる。殿下及び御息所殿下には、同三時御同車にて御禮として、御參内賢所參拜の後、更に青山御所、東宮御所へ御參殿あらせられ、御歸邸の上、各皇族及び宮内大臣等を御招請、御披露の御宴を開かせ給へりときく。

●女子高等師範學校一覽　このころ得たるまゝ、要をつみてかゝげぬ。(表あれど次號をまたん)

來歷　明治廿八年五月調

○明治七年三月東京女子師範學校創立○九年六月附屬幼稚園開設○十一年六月附屬小學校開設○十五年七月附屬高等女學校開設○十八年八月本校を東京師範學校へ合併(東京師範學校は後高等師範學校と改稱)○十九年二月東京師範學校附屬高等女學校文部省總務局所屬となる(初め高等女學校と稱せしが後東京の二字を加ふ)○二十年十月東京高等女學校文部省の直轄となる○二十三年三月高等師範學校の女子部を分離して女子高等師範學校を設置東京高等女學校を本校の附屬とし附屬小學校附屬幼稚園設置(高等師範學校附屬小學校の女生徒及附屬幼稚園を引渡さる)○二十五年五月附屬小學校分教室設置○二十五年九月附屬幼稚園分室設置○二十六年三月附屬高等女學校、仝小學校規則を制定し附屬幼稚園規則を改正す、十月附屬小學校第二

給を開く○二十七年六月本校敎育要旨を定む十二月女子高等師範學校規則を改正す

○生徒學資支給摘要

本校生徒の學資は學用品食料と被服料の二種に區別し左の種別に據り學用品食料は翌月二日（休日なれば繰上ぐ）に被服料は毎年二期（第一期は四月若は入學の月第二期は九月）に支給す

一學用品食料　金四圓　一人一ヶ月支給額

一被服料　左表の區分に據る

生徒區分	一人一ヶ年支給額	第一期支給額	第二期支給額
一年生	金二十四圓	金八圓	金十六圓
二三年生	金十二圓	金五圓	金七圓

●女子高等師範學校規則摘要

目的　女子高等師範學校は尋常師範學校女子部及ひ高等女學校の敎員たるへき者を養成し兼て女子普通敎育及ひ幼兒保育の方法を研究するを以て目的とす

學年　學年は四月一日に始り翌年三月三十一日に終る

生徒募集　生徒の募集は每曆年の末に於てし入學は毎學年の始に於てす

生徒を募集するには北海道廳長官府縣知事をして薦擧書に履歷書體格檢査書を添へて差出さしむ　（書式は略す）

入學試驗　入學試驗は國語、漢文、數學、本邦史の四學科目に就き學力を考査し體格及ひ履歷を撿定するものとす

臨時募集　臨時に缺員を補充するの必要あるときは本則に依らす相當の資格ある者を募集し試驗の上入學を許す

臨時募集に應して入學を本校に願出つる者は願書に履歷書を添へ差出さしむ（書式は略す）

假入學　入學試驗に及第したる者は四箇月以内假に入學せしめ其資性品行才能を審察し適當と認むる者に限り本入學を許す

假入學の生徒は自費とす

誓書　本入學を許されたる生徒には其入學の際誓書を差出さしむ（書式略）

學資　本入學を許可せられたる生徒には文部大臣の認可を經て別に定むる所の規程に依り學資を支給す

學資償還　在學中疾病に依るの外自己の便宜に依り退學を願ふ者は支給せられたる學資を償還せしむ

卒業の後正當の事由なくして服務の義務を盡さざる者亦前項に同じ

退學　品行不良學業不進若くは疾病に依り成業に適せずと認むる者は退學を命ず

○撰　科

尋常師範學校女子部高等女學校教員たるの志望を有する女子にして本校の學科中倫理及び教育學を除き一科目若くは數科目を學修せんとする者あるときは教授上差支なき場合に限り撰科生として入學を許可す

撰科生には必ず倫理學及び教育學を兼修せしむ

撰科生は品行方正身體健全にして試驗の上所撰の學科目を學修するに堪ふべしと認むる者に限る

但し本校に於て教育を受け相當の學力ありと認むる者には試驗を須ゐざることあるべし

入學試驗は學年の末本校に於て之を行ふ

撰科　志願の者には願書に履歷書を添へ差出さしむ（書式略す）

在學期限は二箇年以上三箇年以下とす

撰科生の課業は本科生と共に之を授く

○附屬高等女學校規則摘要

一附屬高等女學校は女子普通教育の方法の研究に資し本校生徒をして女子教育の方法を練習せしむる所とす

一學科目は修身、國語、外國語、歷史、地理、數學、理科、家事、裁縫、習字、圖畫、音樂、體操とす

但し外國語は生徒の志望に依り缺くことを得前項學科目の外漢文を隨意科目とす

一生徒たるべき者は四箇年の尋常小學校卒業若くは之と同等以上の教育を受けたる者とす

一生徒の定員は四百名とす

一附屬高等女學校に補習科を置く

一補習科の學科目は修身、國語、漢文、外國語、家事、裁縫、習字、圖畫、音樂等とす

一補習科の學科目中修身を必修とし其他五科目以下を隨意に修めしむ

但し二科目以上を撰むときは其中少くとも一科目は裁縫、習字、圖畫、音樂の中より撰はしむ

一補習科の修業年限は二箇年とす

一補習科生徒たるべき者は高等女學校卒業若くは之と同等以上の教育を受けたる者とす

一生徒の入學は毎年四月に之を許す

但し缺員ある時は九月十二月に入學を許すことあるべし

○附屬小學校規則摘要

一附屬小學校は普通教育の方法の研究に資し本校生徒をして教育の方法を練習せしむる所とす

一附屬小學校を分ちて第一部第二部第三部とす

一第一部は高等女學校に連續すべき尋常小學校にして多級に編制し四學級を置く

一第二部は尋常小學校の教科と高等小學校の教科を併せ置きたる小學校にして多級に編制し四學級若くは五學級を置く

一第三部は尋常小學校の教科と其補習科とを置きたる小學校にして單級に編制す

一第一部の教科目は修身、讀書、作文、習字、算術、圖畫、裁縫、手工、唱歌、體操とす

一第二部尋常小學校の教科目は修身、讀書、作文、習字、算術、手工、裁縫、唱歌、體操とし高等小學校の教科目は修身、讀書、作文、習字、算術、日本地理、日本歴史、外國地理、理科、圖畫、手工、裁縫、唱歌、體操とす但手工は男兒にのみ之を課す

一第三部尋常小學校の教科目は修身、讀書、作文、習字、算術、手工、裁縫、體操とし補習科の教科目は修身、讀書、作文、習字、算術、裁縫とす但し手工は男兒にのみ之を課す

一兒童定員は凡そ五百名とす

一兒童の入學は毎年四月に之を許す

但し缺員ある時は九月十二月に入學を許すことあるべし

○附屬幼稚園規則摘要

一附屬幼稚園は幼兒保育の方法の研究に資し本校生徒をして幼兒保育の方法を練習せしむる所とす

一保育課目は説話、行儀、手技、唱歌、遊嬉とす

一幼兒の年齡は凡そ三年以上六年以下とす

一幼兒の定員は凡そ二百三十名とす

一入園は豫め期を定めず缺員ある毎に之を許す

一附屬幼稚園に分室を設く

◎内藤耻叟翁の女子教育論　題して女子教育は

如何にすべきぞといふ、よみもて味はへど、いひしらず覺ゆ、げにさもあるべくこそ。

此問題につきては老人の論は大に世人に反對せり今の人は女子を以て一の主人と見なして男と並びたちて世にも交るべき者と思へり是まづ其間違ひの大本ならんもし男女並び立ちてよきものなれど天にも日が二つあるべき筈なり然るに天に日は二つなく月ありて之に配するが如し天地も亦然り天は高くして地はひくし天ありて地なければ物を生ぜざれども地ありて天なければ者も生育することなし故に天は上にありて之を覆ひ之を生じ地は之をうけて之を載せ之を育すること天地の効用なりもし地も亦天と同じく上にあらば何を以てか天の効用をたすけん

凡物は必双立してある者也天地、日月、陰陽、水火の類必之に對するものあれども互に相爭ひては其の双立の効用をなさず必互に調和して相扶けて長ずる者にあらざるはなき也然れば女ありても孤行獨立しては世には立行れぬ故に男に順ひ男を扶けて女は男の爲にはたらき男は女を扶けて之を養ふこと是天地の定理なり智力をくらべても骨格をくらべても女の男にまさることは一つもなしたま〳〵愚なる男と賢なる女とあれどもそれは常にはあらず平均してみれば男はつよく女は弱く男に智あり量ありて女に智量なきものと定まれり是小と雖も辨知すべき所なり

されば女はたゞ男のする業を助けて男をして其人の行をとげしむるが爲に生ずる者なり決して孤行獨立すべきものにあらず必男によりて身を立つる筈のものなりされど女を教ゆる者は男のするわざを補ひて之をして小事に苦勞せしめず男をして安心して大事をなさしむる爲の女と心得させて教ふること第一の肝要なるべし是れなれば夫婦となりても必和睦して永く親愛の情を保つことを得べしもし今のなまいき學者の論の如く女も男と並び立つものとして孤行獨立する者と教ふるならばもとより人の妻にはならぬがよき也これは人の道にそむきて人情にあらざれば行はれぬことなり

されば既に夫の所へゆきて夫の爲にする者となれば必男を助くる道なかるべからず故に男をして忠孝の行を全くさする爲に之を助くるが女の

役なりと心得る樣に敎ふること是女の道の肝要なりかくなければ到底夫婦の和睦は保ちがたかるべし

或人の云く今迄の女は夫を助けて居たれども西洋につき合始まりてからは女も男の通りに表向の交りもせずばなるまじ故に女も男の通りに獨立せねばならぬと云者あり然れどとてもとより女は男を押つけて獨立する必要なし男と共にして他の女子と交るとも何の害あるを見ず但し西洋の男は女の言ふまゝになるを以て男の道となして父母よりも妻を貴ぶと云ふほどの國がらなれどこれは別物なり畢竟男の女に媚ると云ふは犬猫など鳥獸にはあることなれども人の行ひにはあるまじきことと也これは如何に西洋がよければとて學ぶべき行ひにはあらざるなり善惡の考へもなくひたすら西洋がよきと云ふは今のなまいき學者の愚昧なる故なり深く戒むべし

凡二つある者の一つは必ず其一に順ふべきものにてかくなければ物事に爭ひを生ずる者なり故に君臣あれど臣は君に順ひ父子あれど子は必ず父に順ふ夫婦あれど女は必ず男に順ふべき事即ち君臣父子に同じ近頃の學者に此義を知らずして日本の道はすべて上つりにて何事も上を尊び下を卑しくする故に不釣合也と主張する先生ありて是れ物のすわりを知らぬ故なり凡そ物は二つありて並べは必ず爭ふ其一は必ず順ふ故にこそ和睦の出來る者と云ふ情理を知らぬ故なりかく云ふ先生も若し其女房が一々己れがまゝに行ひて一々夫の言に從はずんば家內は必治まるまじもし又其先生は妻の命に從ひて居る歟はしらねどそれなれば畜生のまねをする男と云ふべし日本の男子たる者は既に一家の君たるべき地位をもち生れ來る故に一家內の男女を支配すべきものなるにかくまでも自ら卑屈になると云ふは畢竟西洋に醉ひたる故に心の亂れたる者と云ふて可なり我日本にては幼少の子にてすら男子たるものは女の言にのみ從ふを耻辱とするが日本の國風なり男の權威がなければ國は強くならぬ故なりされど此美風はながく失はぬ樣にありたきものなりもし何事も女に從ふがよきと云はゞ男の權威はなくなりて一國女の風下になる故に其國は必弱くなるなり必日本武勇の風は消滅すべし

玉簾雪にかゝげしころよりや

男々しき跡はきへろめにけん

と云ふ歌あり清少納言と云ふ才女がいでゝ香爐峰の雪は今いかんと仰せられたるみかどの御詞をうけたまはりて他の男子は心附ざるに、つとたちて、玉簾を揭げたれどみかど深く御感ありしと云ふ故事ありこれは清少納言が學者にてさし出たる女なれど白樂天（唐人の名）の詩に香爐峯雪揭簾觀と云ふ詩を覺ゐて居たるを自慢して遠慮もせずかゝる女にはあるまじきさし出たることをしたるをみかども御感心なされたる其比より世の中は女の才におどろかされて男らしき風俗は消失せたりと云ふ心をこめたる歌なり總て世の中の女の盛んなる世は必風俗よわくなりたる例多しこの事はながくなります故次席に於て申述ぶべしただ女は男に順ふて男を助くるものなりと云ふことは日本の美風にして女子教育の大本旨なりと知るべし

凡そ教育と云ふ者はたゞ西洋のまねをする者と心得たるは今日のなまいき學者の通弊なり教育は日本の美風を傳へて古のよきならはしを失ふまじき爲の教育なりと心得べしあしき所を改むるはよきことなれども西洋の風がよろしきとて他人の男と女と吻を接し又は道路にて人の見る目もはゞからず抱合ふてをどるなどは禽獸の行ひにて人のすべき事にはあらずしかるを是れも西洋にてすることなりとて教育に用ゐる時は日本の美風はなくなりて人皆鳥獸にひとしくなるべしこれ等は教育を掌る人の尤も深く愼むべき所なりしかるに女の情を達せん爲には男は何事をも忍んでなすべし是男女の道なりと云ふは西洋の風俗にて日本に用ゆべき事にあらずもしこれを用ゐる時は勇武なる日本の風俗は必軟弱になることとなれば國の爲に大害を生ずることとなり其勘辨もなくひたすらに西洋にてすることなれどよろしきと思ふてとは實に愚昧の至りと云ふべし

●長野縣上田女學校紀念式　例年九月七日は、聖駕東巡の際、同女學校を以て、御旅舘に充てさせ給ひし吉日なるを以て、同小學校職員、町役場員、女學校建築委員等相會し、紀念式を行へりと云ふ。

教の庭

九月二十日兼題　祇王　（天地人のほかは原稿到着順なり）

天　本郷區森川町一番地　三浦　時子

もえ出るも枯るもおなし草なりと
　見しやさとりの始めなりけん

地　三河國寶飯郡遲笑村大字牧野　鈴木美恵子

秋にあはてうき世を人のすてにしは
　君かこと葉のつゆのたまもの

人　同國同村　牧野　幸子

あはれ〳〵君かうたひしことの葉は
　ほとけをさへに諭したりけん

もの〳〵ふのあはれこゝろに誘はれて
　あまさなりにし君にもあるかな　安井軍子

あはれやさ思ふこゝろもまさりけり
　たけのあみさをたゝくくひなに　住山幾子

世をうしさ思ふこゝろのゆかりさや
　さか野におけるつゆのしらたま　住山靜子

さにつらふ君かみさせのゆめこそは
　はかなくさめてくやしかりけん　丸山須磨子

空せみの世のさかなきをかこちつゝ
　さかの〻おくに身をはすてけん　牧野こすゑ子

白たへのくものうてなのあきよりも
　さかの〻つきそさやけかりける　牧野さかき子

うつせみの世のうき雲をよそにみて
　さかのにすめるつきのさやけさ　牧野さは子

もえ出しこさの葉くさはなか〳〵に
　あきにはあはてさかれけるかな　牧野さき子

ちりひちの外にほさけをみちひきし
　さかの〻つきうさやけかりける　進藤かれ子

さもにすむこゝろの水のみなかみは
　さかの〻つゆのしつくなりけり　進藤すゝ子

もえ出しそのにひくさの秋にあはて
　はてしそきみかめくみなりける　進藤もと子

秋かせにつゆのなさけのちりはてゝ
　さかのにしほむをみなへしかな　永井さい子

花ころもいろあらそひしゆめの世を
　すてゝさかのにすみそめのそて　内田ゆか子

秋にあひて世を怨ふ身はなか〳〵に
　さかの〻おくやすみよかりけん　磯部つや子

さかの山しはのをり戸のをり〳〵は
かせふくはらをしたひたりけん
佐々有鄰子

めてられしむかしを今はうらむらん
世をのかれたるこゝろやすさに
徳永ます子

うき世をはのかれてすめる人はしも
あきをもまたて身こそかれぬれ
澤田存子

うき世をはよそに見すてゝさかの原
つきにこゝろをすますきみかな
海島信子

あたしのゝさかのゝおくのおい松は
きみかみさをのしるしなるらん
海島定子

春の花のいろかもふかききみなれさ
世のうきあきはせんすへもなし
花山保江子

をみなへしさけるさかりは秋の野の
つゆにうるほふたみくさもあり
花山操子

しはの戸にさかのゝ風のかよひきて
すきしむかしのゆめたにもなし
松原保子

こひころもぬきすてたれさゝに角に
おもはるゝ身ろわひしかりける
大津千枝子

いかなれは盛りをまたぬさくらはな
さかのゝおくのはるにあふらん
松本よね子

草ふかきさか野のおくにわけいりて
くもりかちなるつきやみにけん
大津鉦子

たらちねのこゝろをくみて行みつに
うきみをなかすこさそかしこき
遠山よしえ子

いさ竹のしらへもふしもよさみなく
なかるゝみつに名をとゝめける
遠山たゝ子

もえいてし芽はいつしかいろかへて
いろこくさけるはなもありけり
河野多知子

あき風のまひのあふきをうちすてゝ
いりしさか野はすゝしかりけん
松風蕾子

里のためなしゝめくみにのすかはの
すゑくむたみのそてやぬれなん
中原貞子

いかはかり身にはしみけん人こゝろ
よそにうつれるありあけのつき
川田こう子

あたしよのさか野の月もなか〳〵に
めてたしさこそきみは見にけめ
名取正代子

人こゝろうつろふあきのいろをみて
さかのゝおくにすみそめにけん
植木鋼子

民のためたてしいさをは千代ふさも
なかくなかれてたえせさらまし
近山まつ子

あさましくきみかこゝろに秋たては
たちまふそてそつゆけかりける
井出信子

うつりゆくうき世の秋の露をふかみ
さかのゝおくにすみそめのそて
小野田のふ子

かきのこすこさの葉草におもひきや
　さらにさかのゝつきを見んとは　川口政子

世をすてし身にもあはれは秋の野の
　かれくさしたふすゝむしのこゑ　馬場乙子

けふよりはむかしを語りさもにみん
　あきのかれのやはるのわかくさ　川田いし子

おもひきや身に秋かせのふきそめて
　さかのゝおくのつゆわけんとは　杠　秀子

いさ竹のうきふしのふたをやめの
　名こそつきせぬ野洲のかはみづ　佐治ふさ子

定めなきこのよをうみのあま小ふね
　つみしなさけそたふさかりける　山本さき子

すてし世をおもふさもなく墨そめの
　そてにつゆおくさかのやまかけ　池谷蘭子

あやにしき立まふそてをすみそめに
　かへてさかのにのこるきみか名　杉浦糸子

たのみなき人ののちの世やすかれさ
　いのるたもさやいかにぬれけん　櫻井花子

うつくしき色ににほひしをみなへし
　さかのゝおくにかれはてにけん　市川柳子

あたしよのさかのゝ奥のつゆけきは
　わかころもてのなみたなるらん　出澤秋香子

いにしへをしのふさかのゝ夕つゆに
　ゐてこそぬらせまつむしのこゑ　出澤ひで子

秋かせのふきたちしよりみやこをは
　さほくさかゆにすみそめのそて　諏訪晴子

たのみなき浮世のかれてなかくに
　さかのゝおくやすみよかりけん　山内かく子

すみなれしみやこをいてゝ思ひきや
　さかのいほりにつきをみんとは　山内照子

野邊の菊折りてたむくるほさけこそ
　わかのりのしさおもひそめけん　吾妻ちか子

くれはとりあやのこゝろも墨ぞめに
　いろなきさかのつきを見るかな　山本いさ子

あぢきなくさか野の嶺にすみそめの
　おもひのつゆにぬるゝそてかな　舘脇ます子

秋にあひてさかのゝ月にかさすかな
　きみかちとせをまひしあふきも　諸井久米子

世をすてゝ今はとおもふすみそめの
　そてつゆけかるさかのおくかな　伊賀直子

うつり行うき世のさかの秋にあひて
　つゆにやつるゝすみそめのそて　久保田りつ子

きくからに袖はぬれなんつゆしけき
　さかのゝおくのこさのしらへを　松岡榮子

身ひとつの秋となげくもあはれなり　うき世のさがのくさのいほりに　松岡花子

非かはのふちせとかはる世のなかは　さがのゝおくやすみよかりけん　山崎すゑ子

あき風にちらぬさがのゝをみなへし　はゝそのかげやおもふなるらん　廣田とし子

もれ出しそのわかくさにまさるかな　さがのゝおくのあきのあはれは　林久子

萌いづるも全し野邊なりかれてのち　にほふくさこそくさのくさなれ　青木存子

秋かぜはこゝはふかしといりにけん　うき世のさがのおくをたづねて　松田靜枝子

せきいれし非川のみつのきよき名を　世になかしけるきみをしぞ思ふ　土屋仙子

秋かぜにふきからされしのへのくさ　つひにはのりのはなさきにけり　三浦たま子

まゝならぬうき世のなたを知る人は　この世はなれしあまにぞ有ける　内田はる子

しる人はあはれとおもへあま小ふね　いつなみかぜのたゝぬものかは　内田たけ子

世をうしとすてゝそきぬる墨ぞめの　ころもさびしきさがのあきかぜ　田中りん子

君が名とともにつきせし千代ふとも　にごるときなきゐさがはのみつ　河野文子

住なれし都をよそに女郎花　うき世のさがに身をのがれけん　岩崎今子

秋風の吹そめしよりあだし世の　さが野にしのぶ袖の露けき　鎌形恒子

のがれすむさが野の庵のしばの戸を　たゝくは夜中のくひななりけん　鎌形潔子

九月二十日兼題　秋懷のことば

天　碓井信子

昔より物のあはれは秋こそまされといひけん如く秋の夕暮ほどあはれ深くさびしきものはあらざりけりそもくまなき月をめづるにつけ草むらにすだく虫の音をきくにつけ過にし事のみ忍ばれておぼえず袖ぞしめりける殊に夜のいたくふけ渡りてあたりしづまりたる頃そよ〳〵と荻の葉の音するなどいとそう〳〵しうていやましにかなしくなには江のよしあし草のみおもひ出でらるゝは此の秋に

なん

あはれさは秋のならひとしりながら
　なぞかくむかり身にはしむらむ

地　大阪西成郡今宮村三一九　松田靜枝子

秋としいへど思ひは千々にみだれて我が身一つに物のあはれをあつめし心地すなるに今宵は澄みわたる弓張月の影を掠めて鴈の一列わたり來りぬ家郷の遠征をおもふと槊を横たへしむかしを知らねどこの聲を聞くにつけ忍びいづるは今年の春こし路にいそぐ鴈とともに浮世見すてし亡き友の身の上なりあはれこの友のありしむかしよ同じ學校のしかも同じ學級にありて互にその首席をあらそひはては折ふしの戯れにもし我れら男子と生れ戰國の世にありなば御身は信玄御身は謙信ならんなどいひもしいはれもして文學の研究に餘念なかりしにいまはその友を先だてあはれ膳に向ひて箸うたゝれしかなしさ氣も心も挫け懷舊の情に堪へがたくやをら庭にたち出づれど眞萩の垣根に誰が乘る駒の轡虫にや聲勇ましく名のりいでぬ折からの虫のねあはれ我が心の駒にむちうてとや思へど秋の夕たかり心づくしなるはあらずなむ

人　大阪市北區相生町百六十二番邸　梶井　久子

さらでも秋はながめがちなるをわきて夕の空ぞいはんかたなきやそこはかとなき雲の行衞もたゞならぬに荻のうは葉をふきおどろかすなる風のおとなひはたあはれなりかし千草にすだく虫の聲々も心ごころに物やかなしきなどすゞろに思ひやらるるを所せうれきわたしたる露の光にくまなき月のさしそひたるいとど似るものなくてなんかゝるをかしき夜のさまを見るにつけてもただ物かなしうのみなり増るぞわりなきや年頃のねがひ何ひとつとしてなしゝ事もなく幾秋をか徒らにながめきつはてなど何のかひかあるべきなど我しらずひとりごたるれどかの虫の音もひときは高く荻の葉風もそよ／＼とさしいらへがほなるは我をあざけるに

やとうしろめたうていで何事も歎かぬぞよきすぎにしことをしづたまきくりかへすとも何にかはせんしばしだに身のうれひ忘れんには月むかひうれしきものはわらじかし見れむ心地もすが／＼しうむねのうき雲もはらはるるよとむかひ居れむ又こしかた行末のことゞもあはれにかなしう思ひいでられて草葉にのみと思ひし露もいつしか袖にやどりてなん

佐々有鄰子

秋懐はくさ／＼あるなかに日ぐらしの終日軒の木末に聲つからしたゝるはしり出の田面はるかに鴈のわたりくる姿まくらの山にさをしかの終夜つまとふあはれなる音の風のむた耳つらぬきてねやに落くるころ昨日まで燕の人なれがほにすこもりたるも今日はつれなく立さりて雛のみつよつふたつ親鳥の後したひて飛行さまも賜のまなこするさく門の喬木に啼しきる聲なさいつれもいつれも懐をますたねなるに中垣のへたてなかりし友の靈祭の庭はことさらにこそ

川田こう子

朝日まはゆきまてにのぼりて軒くち柱かたふける賤が家の庭さへさながら玉をしきつめたる如く白つゆのいと清らにおきわたりたる趣まくなしき心地せらるゝにいとつれ／＼しくもおのつからにしきおりなす萩は今を盛と咲にほへり秋と野邊見がてらに目にふれしことも思ひ出られて長月のながき夜すがらいねがぬる折しもあれと吹くる嵐に人々の夢を驚かされしのみかはこゝろにのこる萩の錦もはた玉なす白つゆものこりなく散みだれてまたもとのうきれにかへれはさすがに軒くちてゆれたる窓やいかにふしわびしからんと思ひやられていとあはれなりけりなへて世のおほかたは春の花ののどやかなるにうかれてあたら年月をいたつらにすごさす秋の夜寒のわびしきに心せすは一度は玉をかさり錦をしくともこれ朝がほのはかなき榮ゐのみ此の秋風こそおそろしけれ

　思ひくさしけりのみ行く秋なれや
　　袖にも露の置きそはりつ

名取正代子

物のあはれは秋こそまされと實に理になんきのふにかはらぬものを秋たつといへばけさは見るものきくものにつけてうらがなしうすゞろに泪ぐまるゝもこれなん人の本性におのつから相あふなめることに夕つかたになりぬれは荻の葉そよく風の音にあはれをそへてなく虫の聲さへいとゞ身にしむ折柄東の方よりさしのぼる月かけはちりはかりのくまもなうすみわたりてひるもものかはとおもふ程なるにこなたにはかりかれの一つら／＼につらなりて松はら遠くすぎわたる見ゐそのけしき實にたとし

へもなくなんやかて夜もふけぬればいづこやらんきぬたのひゞきゝてはつまこふ鹿の聲なといとあはれにきこゐていよ〳〵物淋しうなりゆくなるいかにふけゆく夜半といひながら實に秋はかりさひしきはあらしされと學のまとに文よまんものなとの爲にはこの淋しく物靜なる折こそいみしうたふとけれ春はよろつ物さわかしく心もそらに浮きたつさまにて心ならすも怠りかちなるを秋はさはらんものなくさしのほる月の窓のあたりそよふく風の心地よきに文なとひろけて見ればしらすしらすゝみよまるゝそうれしきやされはこのよき折こそ分秒の時の間なも惜しみてよろつのわざはいそしむへけれ

河野多加子

鐵もとくるはかりの暑さもいつしかすきて桐の落葉に秋は來にけり實に年月の過行くは夢の心地せられぬ櫻咲きいつるかと思へはいつか靑葉とかはり時鳥も聞くか聞かぬにはや梢の薄紅をそめかけて野分の風は用捨もなく尾花ふきまき鹿の妻とふ比とはなりぬ思ひ回らせは哀れや何一つとして成ることもなく身はもとの身にして年月の過行くこそけにうらめしけれ

降田槇子

心なき身にも哀は知られけりと西行法師の詠みたりし秋の夕まくれ音なふ人もなきまゝはし近う出てなかむるに前栽の千草の花のいろ〳〵はかなけに咲き出て夕露しけく置き渡しそよそよと吹く風に桐の古葉の二つ三つ音たてゝ落つるなといとあはれなりなりしも遠山寺の入相の鐘かすかにひひき渡りて淋しさ云はん方なくあはれも一としほまさり何となく物悲しうなりてこし方行末の事なと心に浮ひなす事もなくていたつらにとしの半はを過こしつるおのか身のはかなきなかこち或はむかしの友はたなき人の上さへ思ひ出されてはすすろにしのひかたく覺はす秋をしほりけるは我なからあやしうて

いかなれはかくもかなしきまさるらん
露置きわたす秋の夕くれ

と口すさみつゝ内に入らんとせしに草葉のかけにてきり〳〵すのなき出したる心ありけなりや

田中りん子

空澄わたる秋のけしきは淋しくはあれと月をめつるも秋なるへし夏のあつさにかはりぬる初風も身にしむに露けき窓によりて見出せは古歌なともおもひ出てかの西行のこゝろから身にも哀はしられけり鳴立澤の秋の夕暮と吟しゝもけにとおほゆ物のあはれもいとゝ深くおほゐて荻の上葉に吹風もすさましく一しほのこゝちす雁の聲聞につけても古郷の空のみそ打なかめらゝ

太田さだ子

新玉の年の初め師の君より今年のうちに爲さんとおもふ事共はいかになされもごろに問はせたまひし折はこその忘りの夢なもさまし今年はことになと聞ね上げつゝ尙さるへき卷の講義なごなもきゝ敷島の道文の林の奥ふかく立ち入らむなと矢竹にはや

りし心いつしか春たつ風さそもにゆるび行きてこゝの梅見かしこの櫻かりなさ夢の中道ふみまよひ夏の川邊に傾むく月なもてあそひ高殿のおはしまに時しらす涼みくらして今は早や庭も聲も虫の聲のみいさしげく荻の上葉の秋風身にしむ頃さはなりぬ久方の月の影のみは夜毎にすみまさり行けさも身に添ふ光りさては露はかりもなしあはれなかき秋の夜すから思ひつゝくれは徒らに過きこし昔しの恥かしくいまは志きに如何なれはかくはさ打ちかこたるゝも人やりのわさならねは如何はせむ

今年はさおもひたちしもゆめのまに
秋さひしくもなりにけるかな

雄久保　みち子

夜風の身に染みていさ冷やゝかに覺ゆるにふさされは月の光り窓の破れまより漏れて閨いささひしくまして草葉にすたく虫の聲々いさあはれにも果敢なくなん顕る時には月のさへ〳〵て過ぎこし事のみそ思ひ出らるるあはれ春は花のむしろに遊び浮れ夏の夕には涼しさにうかれて時なうつしつゝいつしか秋も末さなりぬさのふさすきけふさくれて志はしも忘りなまたすなかれゆく月日いるか如しおくるゝはたゝ我身のみさおほえていさやさしうなん

十月兼題

- 五日
  - 歌……鹿聲幽
  - 文……菊を贈られたるかへし
- 廿日
  - 歌……神嘗祭
  - 文……女の心得

言擧せずとは、兎や角云ふ樣なる事なく、直にと云はんが如し。○一首の心は、我が日本男子は、勇武に勝れたるものなれど、假令千軍萬馬の大勢なりとも、一度之に向ひて戰をなす時は、兎角の言を發することなく、直に進擊して、其の大軍を討ち破り、功名を立てゝ歸り來べき男子と思ふぞとなり

人には、勇武と云ふこと尤必要なり。勇武ならざる人は、何事もなす事能はず。まして我が國は、武を以て尙ぶ國體なれど、男子にもあれ、女子にもあれ、兼ねて此の心がけを忘るべからず。若勇武なければ、一の事業を起こし、一の希望を企つるに當り、此くせむかゝる事起こらむ。然せむさる害來たらむ、と、躊躇狼狽のみして、遂に成功することと能はず中途にして廢するに至るなり。すべて、事物は、一利あれど、一害之に伴ふものなれど、善惡邪正、利害得失を能く考へ、少しにても利の勝りたらむ方を思ひ定め、勇武を以て、一刀兩斷に之を決すべし。然らざる時は、常に機會を失して、出來べき事も成就せざるに至る。萬事皆然りまして、軍陣に出で戰場に臨む時は、一しほの勇武を要するなり、寡を以て衆に勝ち、小を以て大を挫くが如きは、唯此の勇武によるなり。苟勇武なければ、千

軍も恐るゝに足らず。萬卒も賴むに足らず。故に、人は此の勇武と云ふことを忘るゝ事なく、常に膽を錬り体を鍛ひ、元氣を活潑にし、義に當りては、一歩も退かず、理によりては一言も枉げず、一旦國家に於いて緩急あらむ、義勇公に奉じ、千軍萬卒を一擊の下に蹂躪し、以て、上は天皇陛下に奉じ、下は國家を擁護して、臣民たる務を盡すべきなり。日本人民、すべて此の如くならむには、支那も恐るゝに足らず。魯西亞も慮るに及はず。英獨佛米と雖も、何の憚ることかあらむ。弱肉強食の今日の世の中、我が國民たるもの、勇武を振ふこと此の歌の如くならずして可ならむや。

楠正行

かへらじとかねて思へば梓弓なき數にいる名をぞとゞむる

梓弓とは、なき數にいるのいるにかゝる枕詞なり。一首の意は、天皇陛下の勅命を蒙り、逆賊に向ひて、戰場に臨むからは、再生きて歸る事能はざるは兼ての覺悟なり。されど、此の世になき人の數に入る、我が名を此處に記して、後世に留めれくとなり。

國家若、一旦緩急ありて、國民擧りて戰場に臨む場合に至らば、皆生きて再歸らざる覺悟なかるべからず。一朝、天皇陛下の宣旨を受け、敵に向ひたらむには、敵の首を取らざれば、己の首を彼に渡すべし。身を惜み命ををしみ、逃遁して汚名を千載の後に殘さんより、潔く討死にして美名を竹帛に垂るべきなり。勝敗は時の運なれども、討死を嫌ふ心にて戰はゞ、決して勝つ期あるべからず。我が祖先は、常に、額には矢は立つとも、背には矢は立てじと言立て、又山行かば草むす屍海行かば水づく屍、大君の邊にこそ死なめ。のどには死なじと決心し給へりき今日の我々臣民も、祖先の遺風を繼かずして可ならんや。此の歌をよまれし楠正行朝臣も、父正成卿の遺志を繼ぎ、逆賊足利尊氏を討ち滅ばさんとして、千辛萬苦せられしかども、南風遂に競はず、如意輪堂に此の一首を殘して、四條畷にて討死せられたり。故に其の美名は、赫々として今日まで耀き、三歲の童兒も知らぬものなし。人は實に此の如くあらまほしき事なり。

源持資

かゝる時さこそ命のをしからめ兼ねてなき身と思ひしらずば

かゝる時とは、武運つきて、兵は討死し、矢はきはまりて、何ともせんすべなき時をさして云へるなり○一首の意は、平常、君の爲民の爲には、此の我が一身は惜むことなしと決心し居れど、此の如き窮迫なる場合に臨み、身命を拋棄する事、何ともなきことなり。若、平常の心がけにして、君の爲民の爲には、此の身はなきものなりと思ひ知らずしてわりたらむには、かゝる時に臨みて、いとゞ命の惜しく思はれんとなり

人は、平常の心がけを第一とす。然らざれど、機に臨み、變に處して、周章狼狽し、遂には、其の措置を失するに至るものなり、日用の細事だに此の如し。況んや、戰場に臨み、身命を捨つる時に於いてをや。平宗盛は、淸盛の子なれども、平家の一門、安德天皇を奉じて、長門の壇の浦にて戰死する時、身命を惜みて、其の子と共に、源氏に降りしかど、己一人の耻を蒙りしのみならず、實に祖先の顏を汚して、斬罪に處せられたり。死する時に死せざれど、死ぬるに勝る耻ありとは、是の事を謂へるなり。然れども其の平常の心がけ、此の歌の如くならざる時は、死する場合に臨みて、身命の惜しく覺えて、死する事能はざるものなり。

此の平常の心がけは、唯死する時のみにあらず、萬事皆然り。假令へば、平常武勇の心がけなき人は、武勇をあらはすべき時に當りて、之をあらはす事能はざるが如し。然りと雖も、此の身命を抛つ心がけは、些細の事、或は、一時の行き懸りなどに於いてあらはすべきものにあらず。君の爲民の爲め、此の二者を離れては、徒死に屬するのみならず、返りて、世人に笑はるゝに至りぬべし。能く心すべき事なりかし。

小野古道

虎はゆる國の境も武士の守るかぎりは安けかりけり

虎はゆる國の境とは、虎は恐しき猛獸にて、飽くことを知らず。故に、勇猛獰惡なる人の住める國の境と云ふことをかく云へり。○一首の意は、如何に猛勇獰惡なる虎の如き人の住みて、其の飽くことを知らざる事、豺狼の如くなる國の境にても、我が日本帝國の武士が、守りてある以上は、一歩も足を入れしめず。寸土も彼に取らるゝ事なし至りて安心なる事なりとの意なり。

古は、忠勇義烈にして、固有の元氣猶盛なりしかば、國民の精神皆此の歌の如く

なりき。今日の人心、果して此の歌の如く元氣あるか。若、此の元氣なからむには、豺狼の爲に呑噬せられんも計り難かるべし。我が國は、東洋の一孤島にして、僅に四千餘萬の人口を有する小國なれども、山水の明媚、土地の豐饒、氣候の順良、産物の夥多、さすがに神の造り給へる國にして、外國に比類するものあることなし。故に魯西亞、英吉利、佛蘭西、獨乙、亞米利加等の諸强國、皆涎を流して、之を羨望せざるはなし。若、一朝釁を開く事あらむには、恰も飢ゑたる豺狼の肉を得たるが如く、爭ひて之に集まる事、論を俟たざるべし。古は、外國の寇を蒙りし事屢なりしかども、常に、之を擊攘して、神州の威烈をあらはしたりしが、今世の人、果して之を一擊の下に屈せしむるを得るか。若、然らずむ、印度となり、布哇とならん事、未必ずしもなしとは云ふべからず。熟、當今の世態を考ふるに、人情浮薄に赴き、文弱に流れ、利に走り、欲に迷ひ、內外本末を顧みず、國家の消長を思はず、彼の赤髯綠眼を見る時は、恰も喪家の狗の如く、頭を垂れ、尾を搖かし、其の愛眷を得んと欲し、或は鬼神の如く戰々として懼るゝもの、比々皆然り。此の如くして、國威を保ち、獨立を爲さんと欲するも、豈得

べけんや。一念此に至れば、轉た悚然たらざるべからず。我が國民たるもの、今の時に當りて、之を挽回し、忠勇義烈の風を養成して以て、緩急の備をなさずば、甞に噬臍の悔あるのみならず、數千年來傳へ來りし祖先の遺風を失墜するに至るべし。宜しく、國民擧りて此の歌に耻ぢざる元氣を回復すべきなり

伏見天皇

天つ空照る日の下にありながら曇る心のくまを持ためや

くまとは曇れる處をさして云ふ○一首の意は、仰ぎて空の色を見る時は、清澄潔白にして、一點の曇もなし。又、照る日のかげを見る時は、昭々として明かなり、其の清明なる空の下日の下に生れて、朝夕、之を頭上に戴きながら、我獨黯暗なる心の隅をもつべしや。實に天空天日に對しても耻づべき事なれば、決してさる心は持たじと宣へるなり。

凡人は心を清淨潔白に持たざるべからず。恰も空の清明なるが如く、日の昭々たるが如くあるべきなり。空は常に清明なるが故に、時として妖雲の爲に覆はるゝ事あるも、忽にして復清明となる。日は長に昭々たるを以て、特に怪霧の爲に

妨げらるゝ事なきにしもあらざれども、暫時にして復昭々の光を見る。人も亦此の如し。心常に清淨潔白なる時は、小人姦邪の爲に、或は寃枉を蒙る事あるも、靜に時節を待てば、復故の清淨潔白の身となる事明白なり。されば、人は、宜しく空と日とを以て、常に心の鏡とすべきなり。偖此の清淨潔白とは、如何なることを云ふかと云ふに、利害の爲に移されず、富貴の爲に奪はれず行ふべからざる事をなさず、取るべからざる物を取らず。表裏を二つにせず。内外に差別を立てず、公平無私にして、上を恐れず下を侮らず、正直と義理とを以て、人の人たる道を行ふにあり、此は廉潔の德と云ひて、人の尤大切なるものなり。世には、上に諂ひ下に驕り、表は温厚にして、裏は險儉、内は姦邪にして、外は篤實、をよろひ、利のある處には、正直を忘れ、益の存する處には、義理を知らず、或は欺き、或は僞り、姦計欺譎至らざる所なく、施さゞる處なくして、意氣昂然、揚々得々として、自英傑と思へるものあり。此の如きは、假令一時盛榮を窮むと雖も、已に天理に背反せるを以て、遂には、世にも人にも見捨てられて、非常なる困難に陷るものなり。人は天地の靈なれば、萬事天理に順ひて行はざるべからず。

紫式部

わりなしや人こそ人といはざらめみづから身をは思ひすつべき

わりなしやとは道理なきことよと云ふことにて嘆息して云へる詞なり○一首の意は、實に世の中はわりなき事にてあるよ。假令、人は、我をさして人とは云はずとも、自、我が身を捨てゝ、人にあらぬ様にはなしがたし。如何に我が身が拙劣なりとても、之を捨てゝしまふことは出來ぬとなり。

人は、自暴自棄と云ふ事を戒めざるべからず、自暴自棄とは、人の善を見ても、行はんともせず、人の諫を聞きても、改めむとはせず、彼の人は之を能くすれども、我は能はずとて、みづから我が身を棄てものにすることなり。苟、人と生れたらんものは、如何に愚痴なりと雖も、人のなさん事は、なして成らぬ事あるべからず、我は能はずと云ふ人は、能はぬにはあらで、行はざるなり。彼之を能くす。我如何でか能くせざらむと思ひ、忍耐勉強して、之を行はゞ何事か成らざる事あらむ。すべて、人は進取の氣を養はざる時は、自然に退守する心募りて、後には、自我が身を捨つる様になるなり此は人の尤愼むべき所なれど、誰も〳〵注

意せざるべからず。

大伴宿禰家持

ますらをは名をし立つべし後の世に聞きつぐ人もかたりつぐがね

ますらをは、大丈夫と産れたるものは、碌々として身を終るべからず。必、功名を一世に揚すべし。然る時には、千載の後までも、語り繼ぎ聞き繼ぎ行て、其の名譽は絶ゆることなきものなれど、必名譽を立つべきものなりとなり。

凡、此の世に生れて、山海の父母の恩を受け、君の恩世の情を蒙りて、一生を空しく終りたらむには、寧生れざるに如かざらむ。犬は門を守り、猫は鼠を取る。獸類だに此の如し。然るを、人間にしてなす事なくぞ、獸にも劣りぬべし。何を以てか、萬物の靈とは云はむ。されど、人たるものは如何にしても人と生れたるしるしは顯はさゞるべからず。否、一世を驚かすほどの功名をぞ立つべきなり。而して功名を立つるにも、各々其の身分に應じてせざるべからず。學者は學術を以てし、政事家は政事を以てし、商業者は商業により、農業家は農事により工

國光

毎月二回十日廿五日發行

本誌の改良は號を逐ふ毎に之を證して餘あり。其國光は公平至正の眼識を以て特立獨歩の議論を縦横し。其劍光は名士高材に盛雄大警拔の意見を上下す。瑰績偉行鏡影是を輝かし。春秋褒貶雜録之を收む。文苑あり歌、詩、文、并び載せ。時事あり、皇、清、洋、盡く記す。彼の政黨以外に在つて時務を知り世勢に通ぜんと欲する者、必ず先づ本誌を讀まざる可らず、彼の政黨内の徒にして常に中正の針路を執らんと欲する者亦必ず本誌を讀まざる可らず。

投稿三則

論說　着實を主とす。　歌詩　脂粉を擯く。　文章　浮華を禁ず。

（定價一冊金拾錢十二冊（半ヶ年分）金壹圓拾錢廿四冊（一ヶ年分）金二圓外に郵稅一冊金壹錢）

國光第十卷第八號目録

東京々橋區築地貳丁目貳拾壹番地
發行所　國光社
（電話番號一九四六）

日用百科全書第五編發刊廣告

從三位子爵長岡護美君題辭。
權掌侍小池道子君題辭。
琴曲名家松本操貞君序文。

九月廿日發兌

琴曲獨稽古

全壹冊美裝紙數二百五拾頁●正價金貳拾錢●郵税六錢

●挿畫 極彩色口繪…寺崎廣業(寫眞)●美人彈琴●舞樂蘭陵王●胡蝶の舞
木版彫刻極密圖數十個(銅版)●芝能樂堂●隔水聽琴聲●アイヌ彈
絃●三曲●淺妻船●京舞子●れどり

世界の風雅國たる、日本第一の樂器は實に琴なり。神代の昔より傳はりて、普く上下に愛玩せられ、風調高邁、音韻精妙、最も餘情に富み、和漢諸樂器の調、一として之に應用せられざるなし。此書は其獨習の秘法を、平易親切に與け、譜を以て之を補ひ、初歩より奥の手まで、其順序に由て明解す、閨秀才女一本を繙き給はゞ、琴曲の妙を得て、日夕の雅興特に濃かなるべし。

日用百科全書 自第壹編至第拾貳編 目次

●第拾參編以下の目次は追て廣告すべし

日用百科全書正價●壹冊金二拾錢●六冊前金壹圓拾錢●郵税一冊に付六錢宛

發兌元 東京市日本橋區本町三丁目 博文館

細川十洲叢序　三輪田眞佐子著

女子の本分　全

●定價金貳拾五錢●郵税金四錢●郵券代用一割增

再版

近者、我邦女子道徳の頽敗に赴くこと、日また一日より甚し。三輪田女史、之に慨する處あり。本書を著し、以て我が邦固有の道徳に基きて、此の婦女子に、其の本分のある處を示さんことを期せらる。本社の一たび、之を世に公にするや。忽にして、再版を賣盡し今や三版の成るを告ぐ。請ふ。續々として、御注文あらんことを。

目録

發行所　東京京橋區築地二丁目二十一番地　國光社（電話一九四六）

●賣捌所

東京　仝　仝　仝　仝　仝　仝　仝　仝　仝　仝　仝　仝　仝　仝　大坂　京都　仙台　名古屋　仝　福岡　熊本　仝　千葉　仝　仝　仝　仝　仝　仝　德島

東京堂　東海堂　文海堂　北隆舘　信文堂　良明堂　武藏屋　文金堂　小林新兵衛　目黑支店　三省堂　岩見屋支店　大倉書店　小林尙文舘　笠原岩吉　岡島書店　東枝律書房　高藤書店　川瀬書店　片野書店　積善舘　長崎書店　宮松學吉　平野常吉　堤安五郎　高寺清兵衛　根本紋二郎　吉田德兵衛　東定藏　多田屋本店　縣黑崎精二

女鑑第九十三號目錄

(明治二十四年八月八日内務省許可)
(明治廿五年三月十二日遞信省認可)

社告

○代價は通貨又は郵便爲替小爲替銀行爲替及通運にて本社へ御直送之事○郵便爲替は東京**新富町**郵便取扱所へ御振込可被下事○郵券を以て代金に換用せらるゝ時は一割增の事○別に領收證出さず金員領收の上は直ちに女鑑を發送すべし若強ひて領收證を要せらるゝ方は別に證書郵送料御送附の事○未納稅の來書は一切受取不申候事

女鑑

每月五日廿日發行

定價		廣告料
一册	十錢	五號活字廿三字詰一行金二十錢
六册(三ヶ月分)	五十五錢	
十二册(半年分)	壹圓	
全國無遞送料		

明治二十八年九月十九日印刷
同 年九月二十日發行

發行兼印刷人 東京京橋區築地二丁目二十一番地 川崎直衛
編輯人 同 山根勇藏
發行所 同 (電話番號一九四六) 國光社
(印刷所 東京國光社印刷部)